

# 書評

No. 49  
1979. 4



書評編集委員会

# 書評／目次

No. 49 1979.4



現世

- 
- 
- 1 羅針盤
- 2 やさしさ世代考 竹内 洋
- 特別寄稿——
- 6 芝居のすすめ 古賀 勝行
- 10 芝居のすすめ 対談編
- 私の研究ノートから●●
- 23 詩の翻訳について (XI) 山村 嘉己  
——ランポーとヴェルレーヌ (その四)——
- コラム・映像——
- 32 自働律の分度器 北沢 純一  
——映像への試み——
- 34 ドール 泉 良樹
- 36 読書の方法 平田 重和
- 39 書物とのつきあい 市川 訓敏
- 42 新入生のための入門書リスト
- 50 書籍部便り
- 51 お知らせ
- 52 編集後記
- 
- 

表紙・文中カット／谷中安規「版画天国」より（岩崎美術社刊）

表紙：天駆ける詩神

# 79.4 羅針盤



語るべき何ものかが喪失してしまいそうないらだちと、語らねばならない痛みのような感覚が出発点のはずであった。思考が状況に応じて安易に修正可能なわけはなく、内在する世界と状況との乖離が否応なく肥大するのは当然のことであった……。

\*  
かつて高橋和己が『死者の視野にあるもの』の中で、人が死なんとする際の最後の映像こそ、この世の人間関係を如実に示しているだろう、というようなことを書いたが、現在において、それほど鮮明な形であらゆることが表現されえるのか、しばしの疑問を抱く。たかだか一〇年程しか違わぬ時間の流れであるにせよ。

\*  
我々の世代は「やさしさの世代」と命名されているようである。世代を語ることにどれほどの意味があるのか疑わしいし、世代内部の多様性階級性の視点を欠く場合が往々にして

ある。しかし、少くともその言葉が一つの象徴として機能し始める時、社会的に賦与される意味と、そのように一面的に拘束される生の様式は一考に値するであろう。「やさしさなんか知らないよ」と言い切ることができない人間にとって、そのもどかしさを井上俊は『死にがいの喪失』の中でうまく表現している。つまり、人々の生の様式まで操作可能な管理社会にあって、自分の現在位置が確認できない時に、生のかかに死を位置付け、包摂しておく必要が生じる。その一つの拠点となるものが「やさしさ」であるというのである。傷付けることも傷付けられることも拒否する「やさしさ」は、そうした弱さを恥じながらも、こだわりを持ち続けたい幻想を駆きたてる。たとえそれが「惨さ」としてしか表現されないとしても。

\*  
そうした惨さを惨さとして自覚しつつも走り続けねばならないのだとしても、その極に、次のような言葉があることも確かなのである。

「私たちは理性性の規範では包摂しえないもの、その余剰である悪や疎外に対決するために、理念化することが不可能な叫び、あるいは市民社会から逸脱した情念を武器として組織したのである。理性によって支配できる感性、あるいはこの世界の内では修正可能であるような矛盾と闘うこと事態が予定調和的な悪ではないか」（高野庸一「遙かなる美の国——高橋和己と全共闘運動」）

# やさしさ世代考

竹内洋

「なあくんちゃって」という軽薄かつやさしさ溢れる言葉が若者に流行しはじめたのはいつごろからだったろうか。私は、『高校生無頼控』の村木正人君のセリフでこれを知った。そして、こう妄想したものである。ある日、とびきりアカデミックな(?)講義をする。講義終了ベルの直前、こういおう。「なあくんちゃって」。

流行語は新しい精神の象徴である。そのかぎり、流行語の意味と背景を掘り下げていくことによって、時代精神や世代精神の一断面には到達することができる。そのために、ムラマサ君にもうすこしつきあおう。

ムラマサ君は失意の女性を慰めながら、こういう。

「……」

だってそうだろう

自分の人生のドラマは

自分以外には主役に

なれないんだから。

脇役あたりに

くわれていて

どうするんだい

……

顔で笑って  
心で泣いて  
涙は心で  
流します



家 族

なあくん  
ちゃってノ  
」

ムラマサ君は行き摺りであつても、失意の人に無関心ではありえない。かわらうとして、かれは思わず人生論を一説ブツてしまふ。それなしでは慰められないのだから。だが一説ブツてしまふ。そのときムラマサ君は、聖なる価値の体現者になつてしまふ。そのときムラマサ君と失意の女性との関係は、弱者同志の共鳴と連帯から、救う者と救われる者との上下関係に転倒してしまふ。「なあくんちゃって」という一句で関係の再転倒(タダの人同志の連帯)がおこなわれる。これをして「やさしさ」というのであらう。

このような「やさしさ」は、ニューファミリー作家とか呼ばれている三田誠広の『僕って何』に遺憾無くあらわれている。私はこの小説を読んだときに、主人公の「僕」についてこう想像した。おばあさんに大事に大事に育てられた、やや肥満気味の若者ノを。

『僕って何』は、学生運動を背景として展開されているが、ここには究極的価値の追求や献身はまったくといいいほどみあたらない。主人公の「僕」が関心を集中し、能弁になるのは、へいまVとへこVにおける愛情と誠実そしてアイデンティティの希求である。

B派の政治理論にはなんの興味もない「僕」も戸川レイ子

の苦しみは痛いほどよくわかる。「僕」の心のレンズは、大宇宙にむけての望遠鏡のためではなく、小宇宙にむかつての顕微鏡のためにあるかのようである。

「それはあんまりひどい言い方じゃないですか。たしかに僕は世間知らずで何の苦勞も知らずに育ってきましたよ。

でもひとが苦しんでいるのを見て、ずっと心配していたんです。せんさくするつもりはありませんが、さつき自治会室で、戸川さんは泣いていたんじゃないですか。戸川さんが泣いて、それから酔っぱらっているのに、どうして僕が「幸福」な人なんですか」

「いま、こうして僕は、ただひとり行くあてもなく街路をさまよい歩いている。……B派の中にも、全共闘の中にも僕は自分の居場所を見つけたことができなかった。この荷やつかいな「僕」というものを、いったいどこに運んでいけばいいのだろうか」

そうだ。「僕って何」は、青春の証しを究極的価値の追求や献身に求められないぶんを、へいまVとへここVのイノセンズ(無辜)にもとめようとする現代の若者の心情の象徴なのだ。それは、ユートピアを外界ではなく、内界にもとめるドラマチック愛好者どこか似ている。

二〇年前の青春文学『われらの時代』(大江健三郎)の主人公南靖男は、性交のあいだに「形而上学について考える」若者

であったのにたいし、『僕って何』の主人公は、全共闘のアジトで「コロッケパン」をもらえなかったことを綿綿と悔しが  
る若者である。

青春の証しの場が漂流し、岸辺のさざ波との真情あふれる戯れとなったのはなぜだろうか。

へしらけVという時代のうねりと無縁ではなさそうである。現代は、絶対を主張する聖なる価値そのものが林立し、絶対は相殺しあい、すさまじい相対化が進行している。他方では、聖なる価値は日々その聖性を剥がされている。というのはこうである。社会学者のバーガーは、「あばぎと相対化」(debanking, unrespectability, relativizing)を社会学の心とみたが、これは社会学の心にとどまらず、近代の社会学の心でもあった。フロイトにしてもマルクスにしても聖なる価値の隠された次元の「あばぎと相対化」を体系的におこなったのだといえる。そして、今日ではこうした「あばぎと相対化」という近代社会科学の心は、俗流されたかたちで「常識的知識」(commonsense Knowledge)や「納得性の構造」(plausibility structure)となっている。ごくふつうの日常生活でも、フロイトもどき現実解釈が氾濫し、「あばぎと相対化」がなされたとき人々は納得する。現代のマス・メディアはこうした「あばぎと相対化」をもっと通俗的解釈図式(スキャンダルリズム)でおこなっている。これは人々の「あばぎ



と「相對化」の「常識的知識」と「納得性の構造」を土台にしており、他面ではそれをますます堅固なものにしていく。あらゆる聖があげられ相對化されていくときに、△しらせ▽は時代精神とならざるをえないだろう。

そうだとしたら、△いま▽と△ここ▽にイノセンスをもとめる『僕って何』は、しらせ時代のシニシズム(冷笑主義)からの精一杯の離脱の表現なのだと見える。それが岸辺のさざ波との戯れにたものであっても。

しかし、△いま▽と△ここ▽におけるイノセンスの希求は「しさにむに」もとめられるわけではない。かかわり自体がソフトアンドメロウなのである。

たとえば、さきに引用したように、「僕」が戸川レイ子にまくしたてた直後、「自分がレイ子をいじめているような気分にな」る。また、そんな会話からレイ子から今晚「泊めてくれる」とせまられると、

「蒲団は母親用のが一組余分にある。その母親用の蒲団に寝ているレイ子の姿を思い浮かべると、僕はひどく追いつめられた気分になってしまふ。」

同じことはアイデンティティの探求についてもいえる。

「僕は思う。レイ子も母親も、ほんとうの『僕』というものを知らないんだ。二人ともなんにも知らないで、『僕』の話をしなから、『僕』の帰りを待っていてくれた……。」

△いま▽と△ここ▽にイノセンスをもとめながら、しさにむにというわけではない。それは旧世代からみれば、ふまじめで、たよりないが、硬さやこわ張りが無いことはたしかだ。ここに「僕」のムラマサ君と同質のやさしさがある。

だが、この種のやさしさはあくまでイノセンスの希求としらせの両極にはられた綱をわたる緊張のもとに存在していると忘れてはならない。しらせながらイノセンスをもとめるイノセンスをもとめながらしらせしているという秘かなダンディズムにやさしさがあることを。だから、危険な綱わたりをやめてしまえば、やさしさは「甘さ」や「あいまいさ」ではない。

では、このような若者の「やさしさ」はいつまで生きられるのだろうか。

その未来については、同世代をして語らせるのがもっとも雄弁かつ説得的だろう。

「しかし、やさしさが、甘さやあいまいさとして受け止められている以上、遠からず、やさしさはあきらめられ、否定されると思うんです。すでに、そんな感じが一部には現われている、とも思うんですが、ぼくは、その後に来るものが怖い。それは強さなんでしょう」(さだ まさし)。

(たけうち よう・社会学部助教授)



# 芝居のすすめ

古 賀 勝 行

## はじめに

書評誌の編集者の思いを考へつゝ筆者が思いをめぐらす事共。

新聞、TV、ラジオ、いずれもが今の若い世代の人々を目の仇のようにのしる。やる気がない。動かない。言わない。聞かない。主体性がない。美への価値観がない……。

人をなじることと、人を支援することは誠に簡単。こてんぱんにやっつけておいてチラッとやさしさを見せる大人たちの発言などは更に安易であり、みすぼらしくさえある。

私は、この原稿を依頼されたとき既に申上げた。私が書いたら批判なんかにはなりませんよ、拍手を贈る内容になりますと。なぜそう言ったのか、その辺りのことをはじめにまとめさせていただく。

「今どきの若い連中は——」というのは何もこの頃のことばかりではない。古くは平安、奈良の頃から大人たちが若い者たちに対して吐きつけてきたことばである。以来、世阿弥の伝書にも見えるし、戦国時代、元禄の世の物語でも吐かれている。しかし、それも時代の識者やガンコ翁が吐いている間は、大したことではない。世の人、皆が口を揃えて言うようになるとシメたものだ。これこそ、新しい時代、新しい文化誕生



の前夜である。現代は、マスコミと幾らかの評論屋さんがメシの種にしてる段階に過ぎない。これがやがてパン屋のおかみさんもオデン屋の大將も皆が吐くようになるかと本物である。この本の読者である大学生が、六〇年前後に生まれた人たちであり、七〇年前後は小学生であったことを思うと、私が、コッペンのある焦げた芳香や、道ばたに捨てられたチューインガムへ注いだ視覚や臭覚のなつかしさと同じように、六〇年や七〇年への思いが、暮れなずむ風景の切り抜きのようになつかしさがられているのかも知れない。雨のそぼ降る日、母に手をひかれ、抱きあげてもらって一目見てしまった現人神の田舎回りの一シーンのように、読者の記憶の中で哀れな敗北のシーンが生きているのかも知れない。一見、はなばなしい時代だったとも言えよう。だけど、あれはヒステリーだったとも思えるし、悪あがきとも、敗け犬のナントカだったかも知れないのだ。

読者のかすかな記憶は暮色なのだろうか、朝焼けなのだろうか。

言ってしまう。私は、そんな記憶の糸さえたぐれない中学、小学校の子供たちに更にワクワクするような胸の高鳴りを覚える。現在の中学、高校生徒は、自分の体を鍛えようとする。いや、鍛えるなんて思いもよらないと言う。体育の時間は休んで、その辺りをウロウロしているだけだとも言う。

信念があつてのことでもない、ただごく自然にそうなのであり、ごく普通にそう発言する。

様々な事件は省くとして、小学校教師の報告を記そう。小学生は既に動きたがらないのではなく、動かない。自分のいる所へ向ってボールが飛んで来てもよけようとは最早しない。ボールを体に当てておく。そしてそばにころがったボールを拾おうともしない。私はシメシメと思う。期は熟してきているらしい。彼らによってはマンガでさえ、苦痛な読書なので



ある。これはあくまで、こうだなどと言う文章なんで馬鹿らしくて読む気もしない。広告を見ての方が心が安らぐ。彼らには全部読んでいる、解ってしまっているのである。正論、クソクラエ。きれいごと、フンだ。金の力と力のからくりが解っているから、彼らにとって大人たちとは、せせら笑いの対象でしかない。こうるさい大人たちが姿を消す頃、そうした彼らによって新しい人間関係と文化が創出されるに違いない。その日までは彼らは、ただひたすら黙して、ボールに体を平然と当てさせておくだろう。

人は、自分に理解出来ないことを恐れる。自然を恐れ、山も川も木も神にしてきた人々は、神に祭りあげることで己のラチ外においてきた。大人たちは彼らが怖いのだ。相手が動いたり、喋ったりしたとたん恐れが薄れる。だから今しばらくは何も喋らぬ方がいい。何もしない方がいい。最近ではテレビドラマ、マンガ連載の周期に沿って学生気質も変化する。一クールが短かいのだ。だから大人たちがハタチ代が怖いように、また彼らはその二、三才年下の連中をこわいと言う。高校生は「いまの中学生はこわい」と言い、中学生は「いまの小学生はこわい」と言う。恐怖時代である。

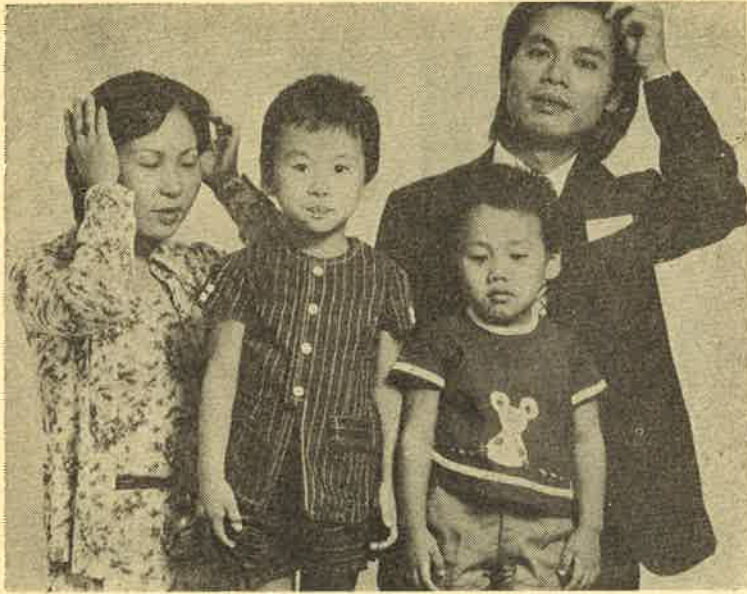
この世は、現在着々と進められている人間の二極化が完成し、その暁にはどのような文化が花開くか――。

極のひとつは、コンピュータなみの頭脳を内蔵した人間た

ち。人をけちらし、つき落とすなんて朝めし前の「頭脳党」。彼らの長所は、けとばしても、つき落ととしても一抹の悲哀も胸に抱かぬことである。そしていま一極は、子供の頃から頭脳明晰ならざることを楯に、勉強不用、人間はやさしさのみ思いやりのみと教えられ、育てられてきた「やさしさ党」。政治は、この二党による連立政権が保たれる。いずれもなりふり構わぬ点で握手している。この国民を二分する二党は、実は「頭脳党」が長男、長女派がバックであり、「やさしさ党」は次男、次女がバックである。そしてその文化は、スポーツ界からは、野球、バレーボールなどの団体競技がすっかり姿を消し、わずかに鉄棒、重量上げ、マットなどの個人技だけが大衆芸能として残っている。

演劇などは、とくに姿を消しており、文学は、源氏、復活などの長編は人間の美意識に叶わぬものとして抹殺され、わずかに大宰や龍之助の短編が、世にも珍らしい長編古典として資料化されている。

人々の住まいは「頭脳党」が、山の手や郊外の大邸宅であり「やさしさ党」が、スラム化した鉄筋ビルだ。これは昔、公団や大手不動産屋が建てたまゝのもの。そして、この大差に「頭脳党」は何の不思議も感じないし、「やさしさ党」は何の不平も言わないのである。むしろ、根っからやさしい党員たちは「頭脳党」の党員のために心からの支援を送り続け



西脇しず江(どろ舟)蓮也(5)経次(3)古賀勝行(どろ舟)

るのだ。それこそ、党の綱領であり、身上であるから、快感さえ覚えている。

映画などは、人間の生理が許さぬ代物になり、二大政党によつて消されて久しい。

演劇は抹殺されたが、音楽と芸能だけは大幅に進歩している。町の騒音が地下に埋められてからと言うもの、町中は静寂そのもの。人々は自分の靴音、ドアのきしみ、食器の触れる音、蛇口の水音に興をそそられ、自分の歌を歌い、踊る。

ア、とか、ピツとかの歌と、片手を上げるだけ、首をかしげるだけの極めて詩的、抽象的に洗練された芸術なのだ。なんと平和な生活だろう。なんと極上の芸術だろう。そして人々は、その自分の作品が気に入ると、電話TVで発表する。全国にはない。自分の知人、親、兄弟にである。見ようと思えば、他人の電話TVも見れるのだが、他人の作品は一体に退屈だから誰も見ない。一方、当のTVは、五秒から十秒単位のすぐれた芸が毎日放映されており、人々は豊かな気分で見覚している。コマーションなどは不用の時代になっており、時おり日本銀行と、「頭脳党」と「やさしさ党」のテロップが入るだけである。

この平和な時代は、有史以来の長期安定時代であるが、人間の社会に子を生まぬ思想が芽生え、社会不安を招き、政局に異様な緊張感が満つるまで続くのである。

# 芝居のすすめ

## — 対談編 —

聞かれ手 古賀勝行  
聞き手 梶麻司 由

### アングラからハンバクへ

梶 古賀さんの付き合いも、いつの間にか九年目になってしまいました。今日は、書評編集者の代理として、私が「どろ舟」と関わる以前のことから語っていただきたいのですが。

古 はっきり言って、つらい、これは。当時、アングラなんてことばもない頃で、商業演劇の他は新劇しかなくて、当然、僕と芝居の関わりも新劇だったんです。文化なんてみな、風俗みたいな次元から流行になって、やがて日常になっ

ていくでしょ。だからアングラの出現までは新劇が非社会的なものとして白眼視されてたわけね。でも実際は新劇の方でどんどん変化して行って、その中から、ゴソゴソと小劇場運動などと後日呼ばれる新しい動きが生まれてきました。自由劇場、六月劇場、そして新宿蛸座のプロデュース公演なんかがあるうだったと思います。そうした時代に相前後して状況劇場や発見会も現われたんですが、僕なんかも自由劇場の「ヴェトロック」「赤目」「毛猿」、六月劇場の「我ら自身の黄金の都市」、発見会の「エンツェンスベルガーにおける犯罪と犯罪」などには胆をつぶされる

思いがしました。僕の知人の役者で、発見会の「此処が彼方かはたまた何処か」の河原の芝居を観たばかりに、舞台づくりを辞めて、それ以来、芝居さえ観なくなつた人がいるけれど、それは確かに強烈な印象で当時の我々に迫ってきましたよね。

梶 その頃の関西というか、古賀さん自身はどんな活動をしてたんですか。  
古 新劇が非常に古い旧劇に思えてきた頃です。

で、当時の関西の幾つかの新劇団の若手ばかりが寄って一年間の対話とケイ古の後、六九年の春「劇団修羅の会」を結成したわけ。

杼 その劇団では全く新しい仕事をした  
んですね。

古 いやいや、そうだったら今でも続い  
てるはずでしょ。六九年から七〇年の  
夏にかけては作品こそ新しいけれど、  
やっぱり東京で評判になった戯曲を上  
演してただけ。七〇年夏からは第二次  
修羅の会だとか何とか言って、創作劇  
を公演し始めたね。自分らの作品をと  
いう思いだけで、もう必死でしたね。  
杼 その前年六九年には、大阪でハンパ  
クが開かれてますが、これにも参加し  
たんでしょ。

古 そう。ハンパクのための演劇グルー  
プ「ハンパク座」というのを任意に結  
成して、あの大阪城の東公園、当時は  
だだっ広い空地だったんですが、あそ  
こにおびただしい数のテントや小屋が  
おっ建てられて、ありとあらゆる表現  
者達が結集して一週間程の連続イベン  
トが開催されたんですが、我々の芝居  
小屋「ハンパク座」は、解体された家

屋の古材や柱を組んで建て、まわりの  
壁の部分は材料不足でダンボール。座  
には関大の演劇部のメンバーもいて、  
関大のネーム入りテントを借りてきて  
天井にしました。あそこからは照明機  
材も借りましたし、ケイ古場は阪大の  
医学部跡に侵入して夜な夜な練習して  
ました。大学の各セクトはタオル、マ  
スクにメット姿で結集し、ペ平連やそ  
の他様々の市民団体、映画、音楽、な  
んでもかんでも集ったお大師さんの市  
みたいでした。

### 歌い手たちとの交わり

杼 話が前後してしまいましたが、それ  
で七〇年の万博の年は創作劇を上演し  
た以外には何か面白いことがありまし  
たか。

古 この年の創作第一回公演で心斎橋の  
ヒロタビルを発見出来たのはグーでし  
た。ここは、それ以降の我々のグルー

プの公演だけでなく、上小、維新派、  
演劇団なんかの興行でも利用されまし  
たからこれは嬉しい事でしたね。

それと、この夏ごろから、喫茶店デ  
イランに出入りする歌い手たちと交わ  
りが出来て一諸に行動する様になった  
事かな。糸川耀史さんがデイランの落  
書きノートを書きシナリオにして、我々の  
劇団と、中川イサト、阿木謙、大塚ま  
さじ、象狂象、西岡、友部正人らのデ  
イランチルドレンと「不演不唱（ブル  
ース）」というのを創り上げて、アベノ  
芸術センターで公演しています。これは  
公演に先立って、初の黒テントの大阪  
城公演の折、前座的に試演してますが、  
日を追って彼らの歌に熱がこもってく  
るのがわかるような頃でもありました。  
杼 翌七一年の修羅の会は？  
古 前年の「カイカイ考」に続いて、や  
はりヒロタビルで、春に「狐狸天網恢  
々」を、夏には「街談」というのを上  
演しましたが、この作品ではデイラン





初の創作劇「カイカイ考」は求められて  
高島屋屋上でも公演

IIに競演してもらいました。実は七〇年の冬から七一年の春にかけては、ケイ古場を使った公演、これは、修羅の会のケイ古場公演という事で修羅場公演というのを毎月、役者が個人企画で上演していましたが、この折、二月

の公演で再度結成したディランIIの特別参加での唄は、実にすばらしいものだったなあ。

その夏、ディランとの「街談」公演の後、メンバーの中に高知出身の男がいて、夏休みのお盆の前後に高知でイベントをやらないかと言いついてね、そこで現地の「よさこい祭り」に対抗して「コイコイ祭り」というのをデッチ上げたんです。喫茶店などの屋内だけでなく、商店街の通りや公園、海水浴場なんかいたる所でイベントやった、映画、音楽、芝居、美術などのゴッチャ煮でね。その折の野外での即興劇の面白さ、楽しさたるや筆舌に尽し難いという感じだね。そこでね、劇団なんかあつてつまらない、やめようということをお願い出したんだけどね。これ、どういうことかと言うと、創作劇にしても、結局は私だったら私が台本を書くわけでしょ。それを何日も何日もケイ古して本番に入る。ところがこうし

た野外劇なんかになると、現場の方がドッと喋ってくるんで台本なんか信用できないし、ケイ古も無効化する訳よ。そこでは役者というもののいいかげんさがはつきりしてきますね。台本のある芝居だと面白い役者が、てんで動けなくなったり、台本芝居では、どうにもならん奴が実に自由に工夫して、はつらつと動いたり、迫力あったりしてね。でも、それだけでは別に解散する必要はないけど、劇団の幾人かが、その高知のイベントに参加してなかった。だからいくら説明したところで解つてくれる事がらではないし、元来、酒も吞まずにギャーギャーまくしたてることの出来ない方なんです、サッサと解散してしまつたんだけど。それ以後は、夫々が自分のプランを発表して、その企画に加担したい者だけが集まつて演る、というかたちにしたんです。秋の学園祭なんか以外は、次の年の春まで大人しくしてましたが。



高知「コイヨイ祭り」イベントのひとコマ。

## 反管理としての「マツリ」

柶　そして、その七二年の春、私が関わることになるんですが、そのときのプランが銭湯劇だった訳ですね。

古　そう。だけどこの銭湯劇については演劇情報センター発行の「演劇批評」二号にくわしく掲載されて、この春に出ますから簡単に――。

柶　詳細は「演劇批評」で、ということですね。簡単に言ってしまうえば、銭湯劇とは、この列島全体が管理されてしまった時代に、ある程度の空間があって、しかもその空間の所有者が直接に交渉できる個人である場所――ということとで探し求めた所だったわけですね。

古　万博を機に、金にあかせたものと、逆にどんどん支出を削っていくもののが同時にワッと出てきたよね。僕らの銭湯劇なんかは捨てて捨てていった芝居とも言えます。で、実際に手がけて

みるとなかなか魅力的な機構を銭湯自体が本来的にもってるんだね。たとえば、先ず観客層。それまでの観客も地下鉄、電車などで充分やって来れる場所だし、銭湯には町内というか、風呂屋の固定客がちゃんというわけでしょう。柶　だから宣伝方法はたった二つでしたね。しかも金のかからない――。

古　ほんの二週間程前から、男湯と女湯に手書きのパネル貼りのポスターを一枚づつ掲示すること。そしていまひとつは、これまでの芝居のお客さん用にプレイガイドジャーナルにスケジュールを載せてもらう。これだけ。劇空間も、男湯女湯の両方を使って、両方に客席を設けると、およそこれまで思いましなかったような芝居展開が可能になったりしてね。

柶　暮れの一二月に大阪・京都連続七カ所での公演のときなどは、男湯に坐った客と、女湯に坐った客は違う芝居を観せられながら、しかも見えない向う

側の芝居の声や音が、こちらの眼前の芝居に閉ってくるというようなヤヤコシイことを実験しましたよね。

この頃は銭湯だけでなく色々な所へ出かけてました――。

古　場所があればどこへでも尻っぽを振って行ってたよね。僕は以前からそうなんだけど、他の人ほどに芝居に対する論理や哲学がない。だから面白さ、楽しさだけが大切になってしまふ。だんだんと、俳優とか役者と呼ぶものから芸人と呼ばれるものの方へ移行していく自分を感じた頃でもありましたね。

柶　この七二年の夏は、高知コイコイ祭りの統編として滋賀赤子山でのキャンピングイベント。そして前手の三里塚幻野祭の統編、京大幻野祭が大文字送り火の夜開催されましたが、その頃から日本列島のいたる所で、色々な形の祭りが生まれ、自分たちの祭りをデッチあげていきましたね。

古　あれはやはりハンパクの分化みたい

なものだったろうし、上からの祭り「万博」に対する個人の思いのありどころだったようでもありますねえ。いずれにしろマツリという三文字でワッと集まるだけ人々はうかれたがっていたし、ね。

あの赤子山の帰途、即興劇と舞をやりながら湖北から湖東をヒッチで南下しつつ大阪へ帰って来たんですが、長浜の神社の床下で野宿したりしてね。芝居をしてその投げ銭、祝儀で一日喰うという旅ね。

杼　そういうものでも古賀さんの場合、これだ、みたいに必死にならないですね。

古　なれないタチなんですよね。必死になるのは想像しただけでいやなんだな。必死さにはみすぼらしさがくっついてる感じで。たとえばハンパクのとぎね、ハンパクを完全に反万博の意味でとらえた参加者がいてね、彼はハンパクに参加した以上は絶対に万博には行かない



「銭湯劇・どろ舟」

古　という、一種非愴な決意をしてましたね。僕なんか、行くか行かないか決めてない、と言うとカンカンになって怒るんですね、その人。

杼　で、結果は？

古　彼はどうしたか知らないけど、僕は行きました。万博会場で撮る企業映画

の仕事ももらったんでホイホイ行きました。あつさと人の列で消耗しましたけど。

だからその芝居によるヒッチ旅なんかも、大阪へ同じ戻る距離を遊びながら喰う、というような感じだけです。僕のどこかには誰でもが芝居をやるよ



うな世の中になつたらいい、という思  
いがいつもあって、それにはできるだ  
け簡単に、いつ、どこでもできるも  
のがいいわけよ。全国の人がそうなる  
と、とやかく議論したり、説得したり  
しなくても愉快な世間になりそうな氣  
がしてね。たとえば、みんなが銭湯劇  
やりだしたら町内ごとに銭湯劇場が生  
まれるわけだし、みんなが街頭劇や野  
外劇をやりだしたら、公園条令や道交  
法の方で消滅していつてくれるでしょ  
うからね。その為には役者は専門家意  
識を捨てなきゃならないだろうし、芸  
術論なんでも一ぺん放り出さな  
きゃいけない。当事者がそれをいやが  
るもんだからなかなか芝居が生活の一  
部にならないんでしょね。それとい  
まひとつは、役者があまり立派な技術  
を提示しないこと。みんなが、なんだ  
あれくらい俺にだってできるぞ、と思  
うことも大事ですよ。

### 街角の芸として

杼　　そういう古賀さんは古典の古典とも  
いわれる能楽の謡曲なんかやっています  
が――。

古　　実は、謡曲や能楽に接するうちに、  
いま言ったようなことを考えるようにな  
ったんです。これは何も現在残って  
いる能楽というより初期の乞食の所業  
といわれた猿楽の頃の事をいろいろ考  
えるうちにポツポツと解けていった芝  
居や芸能のナゾみたいなものですね。

杼　　七二年の夏、玉水町煙との梅地下人  
民広場における興行は、ほとんど乞食  
の仕義でしたね。

古　　あれも、とにかく何かやってメンを  
喰おう、が出発点なんです。意外なこ  
とは、人々がもう投げ銭なんかの風俗  
を失くしてしまっていることでした。  
ワラワラと人垣作って観ても、終ると  
スーッと流れて行くんですね。一時期

のハブニング以来、そんなものを商売  
として見てくれなくなりました。どこ  
かの学生さんがまた何かやってはんの  
やろ、くらいにしか思わないのでしょ  
うね。だから急拠、ザラ紙に駄文を騰  
写版で刷って「おどろ藪」という小冊  
子を作ったんです。ただホツキスで  
とめただけのね。それから、一五分  
程芝居踊りをやってこれを売る、売っ  
てはまた一五分程芝居をやる。これ  
二、三回やると「おどろ藪」は売り切  
れてしまふんです。つまり物との引き  
替えならお金が出せるんですね。だか  
ら毎晩、家に戻ると倍々で増刷です。  
お金を刷ってる感じですよ、これは。  
ところが百冊を抱えていった日に、連  
行劇となつてしまつて。その頃、曾根  
崎署は工事中で、泉の広場の地上角に  
仮署があつたもんで、地下の長い長い  
花道で実に愉快な連行芝居ができたわ  
けです。僕らが連行された後の人民広  
場では、人々の対話の場が生まれたと



同行してた男が言っていましたよ。署では「これが商売でんねん」と言うても解つてくれませんでしたけど。

柳川での満月祭がありましたね。あれは神社の境内で、木々の間で、横に川が流れて、自転車、自動車、舟、リヤカー、そして対岸の火の列と、えらいにぎやかなイベントでしたよ。

伝習館裁判闘争の最中だったし、別の私立高などでは、我々の芝居を観に行かないように、なんて校内放送がやられたり、とにかくこちらとしてはさぞうざな目にあつてしまった。

あの神社の木々の間いっぱいには彼岸花を咲かせて、それだけでも年をとった人たちには気分悪かったんじゃないかな。それでも造花でいっぱい飾った白い舟と、乗る人間がどうしても川に落ちてしまう木舟のシーンは楽しかったよ。

古 その直後、茨木市民会館での「秋祭

り」に参加して、マントヒヒとテイラーでの「お歳暮興行」で暮れました。実はこの「お歳暮興行」は、煙が田舎で正月を迎えたいと言うけど、その旅費がなくてね、二カ所の茶店で連続興行をして、その収入を彼の旅費と僕の小遣いに当てたんです。だから我々自身へのお歳暮だったわけよ。

日本は芸能のさかんな国だが演劇のない国だと言った人がいるけど、そのあたりはどう考えますか。

古 そうだと思えますね。だってそうでも面白くもないものをわざわざ見る人いないと。イヤな気分になせられたり怒られたりね。そのへんは昔から芸能のさかんだった国だけに人々は賢いもんです。観る者をいい気分になせるものしか見ない。日本では芝居より音楽のコンサートの方が動員力あるでしょ。ま、そんなあたりまえのことが解ってくるからますます告発も啓蒙も縁のな

い街角の芸に傾斜して行かざるを得ない。これを次元の低い観客への迎合だと、注意してくれた人がいたけどね。次元を高くとか、あるいはあたかも己が高い次元にいるかのように考えるのがそもそも間違いだし、芝居を面白くないものにしてるんでしょ。

### 日暮れとともの大舞踏会

七三年は冬場から生田神社の日曜市の参加がありましたね。

古 はじめは僕ひとりでしたが、面白いので数人に声をかけたりして——。

京都の小野文彬さんとは、このとき知り合ったんでしたね。

古 自分で孔雀の羽を削ったウキを売ってはいましてね。女性の髪飾りにして

もいいような美しいウキだったよ。その後の神戸まつりのときなんかは、自分の商売以上に応援してくれはって——その前に中の島まつりが開かれる

っていうんで、中の島へ行ってみたんです。ところがちっとも面白くなくてね。だからいざれ似たりよったりだろうと思いつくも出かけてみたんです。

現地には日曜市のメンバーの空間が準備されたけど、なんとなく人出の割にその空間が場違いな感じがして、ワンカップか何か呑んで——。こういう興行って何度やってもそうだけど、やりだす前って、あゝいやだな、このまゝ帰ろうかな、なんて思うもんです。しばらくそうやってウダウダしてると、今度はそんな自分が次第にアホに思えてくる。だから僕にとってそのウダウダの時間はどうしても必要だし、ないとダメなんです。十五分後くらいには人垣の中に裸足で立ってるんですね。杯  
あ、やる寸前の気分は重いですね。恥ずかしい気分。

古  
その恥ずかしい気分は誰にでもあるわけで、ただ人によってその線の引き所に差があるだけです。胸はいいけ

どへソは出せないとか、へソはいいけど尻はいやだとか。そんなもの一べんあらわにしてしまうと後は大したことないものばかりですがね。神戸まつりるときも客の中から高校生と大学生くらいの兄弟が出てきて、俺たちも一緒に踊らせてくれて言うんですね。

どうぞどうぞって言うと、何か衣裳を借りたい、と言う。余分に持ってるわけなし、仕方ないから衣裳や道具などを包んだ風呂敷を貸してやったんです。そしてね、ま、これ一枚でも着けときゃ恥かしくないよな、なんて言って月光仮面みたいに飛び回ってま



紅倉庫（ギャラリー田起オガワ）での  
「駈け込み訴え」

した。で、日暮れと共に人垣はふくらんで、とうとうそこから勝手にダンボールなんか拾って来ては自分らの席をこしかえてそこから動かない連中も出てきて……。ま、客は白人、黒人、

黄人いろいろですが、とにかくかつてない大舞踏会になりました。新聞社のカメラマンの人なんかバチャバチャ、フラッシュをたいてね。

古 フラッシュを嫌わないんですね。銭湯劇なんかでもおかまいなしだったし。観てる客の方で怒ったりして。

古 僕は賑やかだといいで、全然構わない。パツパツと光るフラッシュだって、あれはあれなりに賑やかな感じが出ますよ。神戸まつりなんかでは「騒祭業」と書いたノボりさえ掲げてましたから。あのカメラマンあとでスシの折りを差入れしてくれた。そう、差入れと言えばね、一緒に踊ってた黒人兵がね、見えなくなつたなど思つてたら両手いっぱいカンビールを仕入れて

来てみんなに差入れしてくれて、呑め呑め、そしてもっとやれって言うですな、これが。こうなると嬉しがるの僕なんか、もうその極よ。

古 中年のおばさんの話は？

古 あー。その中年のおばさんは途中から我々の仲間に入ってきて一緒に踊ってたんだけど、帰るまでいてね、来年もぎつときでえな、といわれてね。翌年行くと、やっぱりやって来てね「息子をぜひ連れて来ようと思つたんやけどサッカーのケイ古でアカンねんてエ腹たつさかい、私の妹、電話で呼び出して連れて来てん」言うて、中年のおばはんが中年の妹を紹介してくればって、何や知らんけどこつちがタマゲて。

古 ギターの応援者がいたんでしょ。

古 うん。最初の年は地元のギター抱えた高校生に頼んだけど、やりだすとね、白人、黒人なんか自分でもハーモニカ加えてきたり、歌を加えたりしてね。

大体、一〇分くらい一人芝居で、それ

が踊りに移行していくわけですよ。この部分になるとどっと皆なが飛び入りしてくるわけよ。小一時間でちよつと休息して、また同じ形式でくり返すんです。夜が更けてくるとだんだん休けい抜きになって、おまけがついて、そのおまけにおまけついたりして終電ギリギリまで騒いでました。

いづれ、お役所の臭いのする祭りですね、行ってみると、ほんとみんなゾロゾロ歩いてはパレードを観るだけみたいな祭りですから、いいかげん皆な欲求不満の状態なんです。だから、あの三角に区切られた僕らの空間はウサ晴らしの部分になってたんでしょね。その後、年を追って規制がきびしくなつてあつという間に神戸まつりは昼間だけの祭りになってしまいました。

### 関西アンケラと演劇批評

古 その年の6月には第一回目の同時代

芸人が開催されましたが。

古 あれはプレイガイドジャーナルの主催で、源ヶ橋演舞場でしたが、翌七四年にも江坂の大同生命ホールで開かれましたね。その後はどういふことになったのか詳しくは聞いてませんから。

この七三年の秋には太融寺の無滅社がオープンしまして、僕らのどろ舟がこけら落とし公演をやってます。その後何回かやりましたが、ほんの八畳余りのスペースで色んなイベントがありました。一二月の公演のとき長男が生まれました、四月の公演のときは子供を寝かす隙間さえなくて、受付の机に眠らせて興行しましたね。この秋は、柳川満月祭をプロデュースした連中が、現地で洋輔や、寛、友部らのコンサートを市民会館で開いてて、たまたま帰省してた私も特別幕間踊りをやりましたが、ボロ蚊帳をまとしてましたから、さしずめ故郷にボロを、ですね。

柶 七四年は、無滅社と並行して、世界

長ビル地下のギャラリ、由紀オガワの小川さんの援助をいただき、紅倉庫という名前前で公演をやらせてもらいましたが、こゝの空間ではやはり一二月の「駆け込み訴え」が鮮明ですね。

古 あれは何といつても地下の密閉感と山本公成の音との関わり方の面白さでしたよね。次の年に鳥之内小劇場でもやってみたんですが、これは実にまずい結果でした。

柶 この七四年の夏は、仙台の雀の森の龍峰らの企画で「仙台七夕カーニバル」に出かけましたね。やっぱり商店街で警官のお世話になって——。

古 ははは。着物の袖をつかまれてね。こっちでグイと腕を引くとビリッとさけてしまつて。だから警官をにらんでやったら、向うさんでスゴスゴ離れて行つたりして。

柶 それは、にらんだからというより、あのメイクの顔をまともに見てしまつたからじゃないですかね。

古 そうですか？ そんなことないよ。  
柶 いやいや、まあまあ、この秋、古賀さんは大阪の若い劇団が集つて本を出そうと呼びかけましたね。

古 「馬糞誌」創刊準備号ね。これを自分で作つて呼びかけたら、周囲のほとんどの劇団の代表者が集つてくれたんです。ところがミイラとりがミイラの類で、翌春の維新派の「百頭女」公演に参加するハメになつてね。その次の淀川の公演では、またまた他のグループの参加を説得して回つたりして——これは関西アングラ総結集なんてうたいましたが、本当にそんな感じの興行でしたね。あと維新派とは、梅田オメガの「あぶり出し」、それから七七年の夏の東京公演と天王寺野音の「とにかくあの人のあかんたれになりたくて」まで。ま、馬糞誌のための集まりが、淀川や東京公演、天王寺野音公演となつてきて、いま新しい演劇情報センターの誕生をみ、「演劇批評」誌の発行

へと流れて来たんだと思っておりますが、この本のあり方と共に、現在の関西の中小グループの現状はひとつの大きな難題を抱えていると思います。それはね、新しく芝居をやる人が増えていない。若い人がやらなくなったことです。だから自ずと、平均年齢はどんどん上ってくるわけよ。一方で僕らはますますのんびり化してるし、時おりイライラとしてるふりをしてみる程度ね。芝居なんて大したことじゃないですから、ホイホイやったらいいのに、



古賀さん

と思うけど、最近の人は逆に大したことをやりたいのかな。そうとも思えないし——

栞　ところで一般の人から見ると一番興味ある関心事は、我々が喰えもしない芝居やってて一体どうやって喰いつないでいるからしいんだけど、その辺を少し——。

古　これもまた大したことないんで申訳ないくらいですね。僕はね、人間が生きて行く上で欲しいものって、大まかに言って二本立てなんでね、どちらか一



榎司由さん

方を大切にしたかったら、もう一方は大ざっぱにしとくしかないと思ってるんです。よく好きなことやれていゝです。すねって言われる。つまりその人は、もう一方の方を大切にしてる、だから好きなことやりたいというのは他のもう一方に過ぎない。大ざっぱな方なんです。だとすると皆な同じなんです。大切にする一本の作品を観たいばかりに、もう一本の作品のうちにトイレに行ったり、メシを喰ったり、居眠りしたりしてるわけです。大ざっぱ



過ぎる程、大きっぱである必要があるね。それでもやっぱり現代生活では現金がいる。だからバイトをやる。バイトだから先方にも喜ばれて、しかも結構次から次にあるもんです。肉体労働を嫌わず、見せ物になることもいとわなければ、何でもできるよ。

柶 NHKの石堂さんの「火の国に」、それから現在の岩間さんの「わたしは海」での方言指導なんかも身軽な生活者でなくちゃ出来ない仕事ですね。

古 でしょうね。あれは作者の原稿を方に書き替える所からやるんですが、八カ月とか一〇カ月の仕事ですから、時間的には楽な割に安定収入を保障されるわけです。それにしても世の中、いろんな仕事があるもんだと感心しましたね。

柶 前回の「火の国に」では、役者の方の仕事をやったじゃないですか。初日の花泥棒役と、結末部の清川虹子女史の雇人になったりして。では最後に

この所「演劇批評」の編集以外、黙してしまっている古賀さんの現状が何なのか、聞かせてもらって終りましょう。

古 そうですね。直接何かがあったからということはないのですが、探すとすれば七七年の春、解同の府連主催の演劇研修会の講師というか手伝いというか、若い人たちの演劇創りに仕事として加わって、考えることがあったこと。続いて秋、これは府連内の村田拓さんがプロデュースして、岩田直二さん演出、菊川徳之助さん舞監の「寛政五人衆」というのに誘われるまゝに参加して五人衆の一番年かざの役をいたただいて、豊岡市民会館で公演した経験と言えるかと思えます。この芝居、全国各地で上演されてきたらしんだけど、僕は初めての公演だったんです。プロ、アマ、素人混合のキャスティングなんですけど、現地で一〇人余りの人々も加わって舞台がい古、本番となっていたんですが、芝居の創られ方自体は

実にオーソドックスなんです。驚いたのは現地で加わった臨時の役者さんと、当日の観客の反応なんです。僕なんか、こんな芝居が、こんな観客があったんだという思いですっかりまいてしまったんです。確かにお客さんと芝居との深い関わりはあるんですが、それにしても尋常ではない空気を、なんと芝居ごときがつくったんですね。それからでしょうか、二年や三年、空白の時間が流れてもいいわい、とね。

柶 じゃあ、いまがその熟慮の最中ということですか。

古 あははは、それ程のことないけどね。橋麻司由さん、あなたともそろそろ訣別すべき時かも知れませぬね。長すぎました、おつき合いが。お互いに隙間が感じられるし。

柶 私も実はそういう気がしてるんです。とりあえず今日は、仮別離会みたいなものですかね。

古 水盃がわりに、一杯やって帰ろうか。いいですね。

## ランボーとヴェルレーヌ（その四）

### ——地獄の季節の終焉——

山 村 嘉 己

#### 1

「錯乱」IIは、ランボーが自らのすべてをかけて築いてきた「見者」の作業の痛ましい挫折を示して終ったごとく見えるとすでにいった。しかし、それを「これは過ぎ去ったことだ」と言いすてた結びの言葉には、かれの挫折の思いが取り返しのつかないほど致命的なものではなかったのではないかとわれわれに思わせる微妙なニュアンスがある。なるほど、それは夢想と幻覚による「見者」の試みが誤ったものであっ

たことをたしかに認めている。だがそれによって、かれがそれまでの自らのすべての試みを否定しようとしたという結論に到るのは尚早である。C・A・ハケットも指摘するように、この「錯乱」の二章は「表題に反して、妄想的とか、熱狂的とはいえない、むしろ、もっとも客観的で、もっとも巧みに構想された部分」とすらいえるものであることに注意したい。絶望はあるが、その絶望はすでにふり返えられたものとして静かにそこにあるのである。

ランボーがああコンミュン体験以来「錯乱」によって「見者」の世界に到ろうと努めたことはいうまでもないが、



ジャルルヴの記念碑

その錯乱が《理にかなったもの (raisonnable)》であると述べていることを忘れてはならない。かれが阿片を試みたということは有名で、《地獄の季節》や《イリュミナション》の多くを、その陶酔状態の産物とする考え方も少くはないが、その体験自身も、M・A・リュッフがいうように《例外的で実りの少い》ものにすぎず、そのような感覚の戯れでしかない幻想こそかれがここで全面的に否定しようとしたものなのであった。解放と幸福を求めるあまり思わずそのような小手先の《錯乱》に走ろうとした自らの愚かさを、今、ランボーはようやく身にしみて思い知ったといえは言いすぎになるだろうか。かくて、この後につづく「不可能」から「別れ」に到る

『地獄の季節』の後半は、その苦痛をこえた反省を示して、全体的にかなり平靜な調子のなかで展開されて行く。

ああ、ぼくの子供の頃のあの生活、時を選ばず街道を歩き、信じられぬほど飲み食いもせず、乞食のなかの乞食よりもずっと無欲で、故郷も友もないことが自慢だった。それが何と愚かなことだったか——ああやっと今、それに気づいたのだ！

こう言いながら、ランボーはここでもまたキリスト教の支配する西欧世界への反撥を隠そうとはしない。とくに近代科学の出現はキリスト教とともにますます人間に《おのれをもてあそぶ》ことを教え、《分り切ったことを証明し、その証明をくり返す喜びにふくれ上らせる》のである。人間はもうそのようにしか生きられない。《ブリュドム氏(アンリ・モンエの創造した人物、ブルジョワの典型)はキリストと一緒に生まれた》と、ランボーははきすてるように宣言する。

ここに到って、《原始の国、東洋の叡智》が遠い願望となつて呼び出される。しかし、R・ド・ルネヴィルたちが主張するほど、ランボーの東洋思想への理解が深いとは思えない。かれが夢見るのは、あくまでも西欧種のキリスト教を離れた純潔の楽園なのである。そのためには《安っぽい理性》をす

ててはげしい《精神》をとりもどさねばならない。ところがその《精神》が眠り込んでいたのだ。《今までこの精神が目ざめていてくれたら、毒を含んだ本能に屈服することもなかったであろうに。》

これより後はいつもぼくの精神が目ざめていれば、ぼくたちはやがて真理に到達するだろう。それはきつと涙を流すその天使たちでぼくたちを包んでくれるのだ。

この真理への歩みは暗く、厳しい。しかし、時おり、その暗闇を貫いて輝く「閃光」がある。

人間の労働！　これが時にぼくの深淵を照し出す爆発だ。

この《労働》は《科学》と並んで近代の伝道者——つまりだれもかれもに信奉されているブルジョワ道徳に基いたそれではけっしてない——ランボーがすでに「見者の手紙」のなかで、詩人を労働者と規定していることを想起しよう。それは真の人間の解放という大義を目ざす自らの全存在を賭けた至純の行為なのだ——《科学ってやつはのろすぎる。祈りは疾駆し、信仰の光はとどろく》と、かれは言う。いそがなければ、この夜をこえた向うの《永遠の報い》はえられない。し

かし、一方では、言いたい疲労感が押しよせる。のらくらしながら生きて行けと囁く声も聞えてくる。どうしても、キリスト教の軛は脱し切れない。病院のベッドの上にもよみがえって来た香の匂い。(ここにもヴェルレーヌとのロンドンでの生活の痕跡を認めることはたやすい) いっそ、反抗を捨てて身を任そうか。《いやだ！ いやだ！ 今、ぼくは死に対して反抗する。》このように覚悟を定めたかれにとっては、《労働》すらあまりにも軽いものと思われるほどであった。ランボーにおける《労働》(travail)の概念についてはあまり重要視されていないように見えるが、ここで少しこの問題に目をとめておくことはけっして無駄ではあるまい。たとえばリュッフのいうように、かれの《労働》のなかに《雇用》の観念はまったくない。かれは糊口をしのぐ賃労働を *labeur* と呼んで *travail* とははっきり区別している。かれにとっての《労働》とは報酬とか利害をまったく越えた、人間の存在のすべてを賭けうる全身的な作業なのであった。あのパリ・コムミュンヌの反逆者たちが、ひたすら、人間的な夢に酔ったように、ランボーにとっても、それは真に《理にかなった》しかも人を酔わせるにたる現実の破壊作業にはかならなかった。J・P・リシャルはこの間の事情を烟眼よく「彼は稲妻のような爆発、またたく間の実現という形でしか、労働を受け入れない。これは言いかえれば革命という形なのである」

『詩と深さ』有田忠郎記と、喝破している。《生活を変える》ことが問題であったかれには漸進的な進行を見せる《労働》ではまだまだ手ぬるいものに思えたのであった。だからこそ《労働》もまだかれの自負心には《あまりにも軽い》ものと言わざるをえなかったのである。

今や、《新しい労働》が、《新しい智慧》が求められねばならない。《心と魂と精神》という《三人の博士》が真に生き生きと行動を起す降誕祭を礼拝するのだ。この新しい決意の誕生は、まさしくかれの『地獄の季節』の終焉を告げるものであった。

ところで、今、ぼくはぼくの地獄と縁を切ったと信じている。ほんとうにあれば地獄だった。昔ながらの地獄、人の子がその扉を開けた地獄だった。

「朝」の光とともに、ランポーは《もはや人生を呪うまい》と明確に宣言し、新しい前進を誓うのである。実質的に言えば、この「朝」の宣言によって『地獄の季節』は閉じられてもよかった。S・ベルナルなど「はじめ、ランポーはこのテキストによって『地獄の季節』との関係を閉じようと思っていたようだ……それは比較的楽観的な調子で終りを告げる。ここでの口調は疲れを見せているが前章に較べれば平靜



ランポー自画像

である。」と、分析している。それ故、事実上の最終章「別れ」は、その題名に似合わずむしろ、新しい出発への《門出の歌》の趣きを呈している。

秋だ、もう！——しかし、ぼくたちが季節のまにまに死んで行く人を遠くはなれ、神聖な光の発見に自らを賭けているなら、どうして永遠の太陽などをなつかしむのか。



これは、もう秋になったのかという詠嘆をこめた叫びではない。むしろ、『地獄の季節』の夏をこえてきた人間の新しい立場の確認である。《永遠の太陽》という幻想はすてさらねばならない。そのためにも「別れ」はさらに明確に意識されるべきであろう。

ぼくはあらゆる祝祭を、あらゆる勝利をあらゆるドラマを創造した。ぼくは新しい花を、新しい星を、新しい肉体を、さらに新しい言葉を発明しようと試みた。ぼくは途方もない力をえられると信じた。ところが、ああ、ぼくの想像力と数々の思い出を地下に埋めねばならないとは！芸術家と語り手の美しい栄光は奪い去られたのだ！

このぼくが、一切の道徳を免除され、道士とも天使とも自称したこのぼくが、義務を求めて、土に帰るのだ。抱きしめねばならないあらゆる現実だ！ 百姓だ！

これは幻覚の時期への見事な訣別の言葉である。百姓に帰るといふことは、かれが本然の自分に帰ることを選んだととっていい——ランボオの母方が百姓であったことを忘れてはならない——あるいはここに『創世紀』(三ノ17・19)のパロディを認めることもできる——「あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。……あなたは顔に汗してパンを食べ、つ

いに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰る」。(エデンの園でのアダムへの言葉)——しかし、大切なことは、かれがここではつきりと自らの立場を自覚したことである。かれは神よりも人間を選び、天国よりも地上を選んだのであった。この確認のなから明るい転調が訪れる。

かくて、自らを縛りつけていた呪われた記憶のすべてを払い落し、《そうだ、新しい時はともかくにもじつに厳しい》と、自らに言い聞かせたランボオは、頌歌も灯りもない辛い夜のなかをただ前進するのみである。《絶対的に現代的でなければならぬ》。そのためには人間同士の戦闘に劣らぬはげしい精神の闘争が要求されよう。何が正しいかを考えるのは神の楽しみに任しておけばいい。

ところで、今は前夜だ。生氣と真の優しさの流入をことごとく受け入れよう。そして、暁が来たら、燃えるような忍耐に武装されて、ぼくたちはすばらしい街に入っていくだろう。

この《街》がはたして何なのか。それは今ひとつ明確でない。あるいは『イリュミナシオン』のなかでかれ自身がすばらしい描写を示すあの未来都市かも知れない。(S・ベルナー

ルの説)あるいは、かれの読書の記憶にあったミシュレの《宇宙の共和国》であったかも知れない。(スターキーの説しかし、いずれにしてもこの不明確さはランボー自身のなかで指向はすでに明白であっても対象がまだ定まっていなかったことを意味するのではなからうか。事実、この後、数年のかれの現実世界における軌跡がじつに複雑な様相を呈することは周知の通りである。だが、このことでランボーを責めることは当るまい。かれは最後にもう一度はっきりとかれの目的を宣言してゐるではないか。

《ひとつの魂と肉体のなかに真理を所有すること》と。

## 2

かくて、未来への決意をひめた「別れ」によってランボーの『地獄の季節』は終りを告げた。ちょうど作品の終りの《秋だ、もう》と符節を合わせるようにロッシュの田園にも秋が訪れていた。かれはブリュッセルのポルト書房に出版を依頼する。珍しくもその前金は母親が工面してくれた。僅か五十四頁の小冊子、部数は五百部、定価一フラン、代金分割払いで、著者用見本は七・八部つけるが、残額は本と引換えという条件であった。

十月、でき上ったこの詩集を受け取りにランボーはブリュッセルに赴く。しかし、もともと、かれの書いたものの意味など分るはずもない母親が、快く援助を続けることはない。残部を受け取る金はかれの手許にはなかった。やむをえずランボーは著者用の献本数部だけを受けとって、それを獄中のヴェルレーヌのほか、ドラエー、ミヨール、フォランなどの友人に贈った。せつかくの残部はそのまま、ポルト書房の倉庫の埃のなかに眠り続けた、一九〇一年、ベルギーの愛書家レオン・ロツソーの手によって発見されるまで。(ロツソーが専門家たちと検討を加え、これを公表するまでにはさらに十数年が流れている。)

それにしても、自らがはじめて——そして、ついには最後になつたのだが——世に問う作品を刷り上げたランボーは、これを機会に、ふたたびパリに復帰しようとして十月末に《悲しい穴ぐら》ロッシュを後にした。しかし、パリでの人々の反応はきわめて冷淡であった。ブリュッセルでの忌むしいきさつはすでにカルチュ・ラタンにも届いていた。実際は被害者であつたかれが、かえって加害者にされ、悪者扱いを受けることになつたのである。「かれは作品によってよりも、ヴェルレーヌとの事件のためにはるかに有名だった」と、ある人は報告している。

ただ一人、失意のかれに理解と暖かい友情を示した若い詩



ジュールマン・ヌーヴォー

人がいた。かれの名はジェルマン・ヌーヴォー。プロヴァンス出身の陽気な若者であった。マタラツソの伝記によれば、「肉体的にも精神的にも、ランボーとは反対で、小柄で、褐色の髪、元氣一杯、愛想よく、いくらか気取ったところもある独創的な才能を持っていた。」カフエ・タブーレイで独り淋しく飲んでいたランボーに近づいたヌーヴォーは、もともととジュテイス・サークルで識り合っていた心易さもあって話をかわすうち、すっかりこの異色の詩人に心をひかれた。世界中を歩き廻るのが唯一の望みだというランボーに、自分

はどこまでもついて行くよと応じるヌーヴォーであった。

この友情だけを唯一の収獲にランボーはまたロッシュへ戻って行った。この時、かれはうわべだけではない陽気さで、手許にあった著者用の『地獄の季節』ほか、いくつかの原稿、反古草稿を焼き払ったという。(ただし『イリュミナション』の原稿はのぞいている。このことを意味については後で考えてみたい。)これが、ランボー伝説の中でもっとも有名な劇的事件に仕立てられたことは周知の通りである。妹、イザベルはそこに「地獄墮ち」の作品をなめつくす浄化の焰を見、そのイザベルを妻にしたパテルヌ・ベリッシヨンは自らの天才を生贄に供するランボー像をつくり出し、マラルメまで「かれは生きながらにみずからの詩の切除手術をした」と嘆じたのであった。わが国でも、小林秀雄の『地獄の季節』解釈はこの神話の上に築かれた美しい仮説であったのである。しかし、すでに、何度もふれて来たように、『地獄の季節』はけっして、ランボーという白鳥の最後の叫びではない。あくなき人間の探求者として、あるいは絶対の自己追跡者としてかれを考える立場に立つとき、われわれはアフリカ流浪も含めてかれの全体的な発展を辿り直す必要をさらに感じずにはおれない。ヌーヴォーとの新しい友情をきっかけにふたたびロンドンに飛んだランボーの足跡を追いつつ、『イリュミナション』の意味を問うことがわれわれの次の課題となるであろう。

ともあれ、ここでヴェルレーヌとのめぐり合いによって生まれた『地獄の季節』はついにその幕を閉じた。この舞台の一方の荷い手ヴェルレーヌについてふれずにおくのも片手落ちだろう。七三年八月、独房に収容されたヴェルレーヌは、そのなかで相いも変わらずランボーとの友情をなつかしみ、同時に妻マチルドとの愛が復活することも信じて疑わなかった。

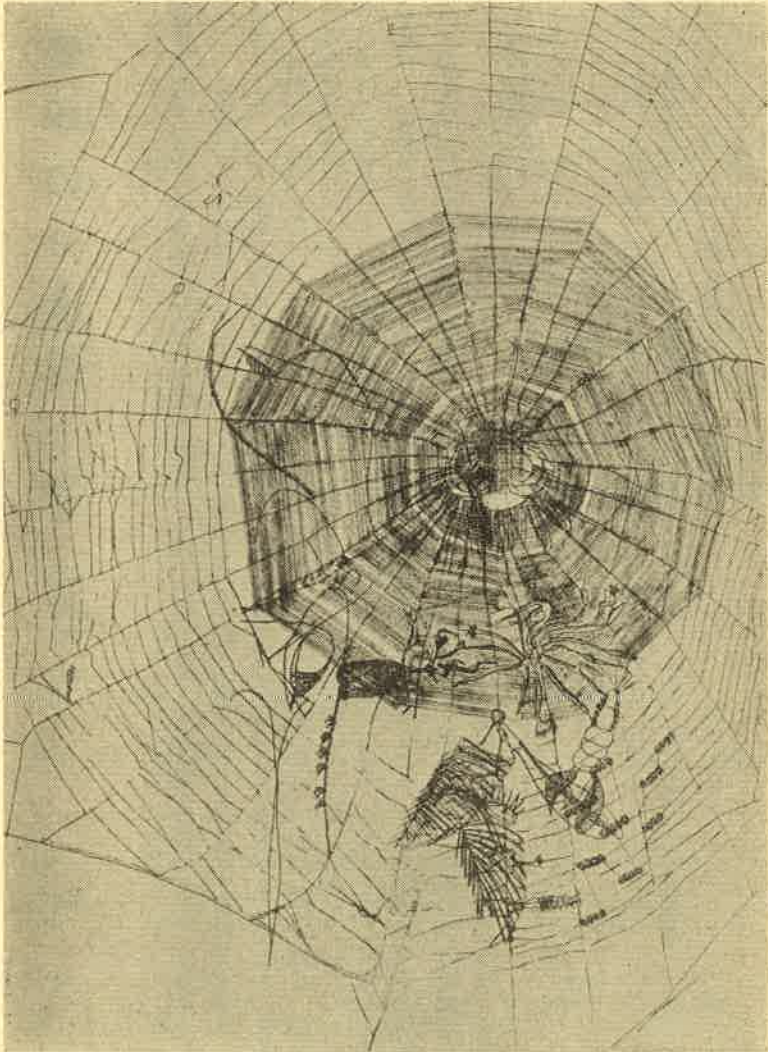
友人への手紙のなかで、「あいつの手ひどい振舞い」も許してやる用意があるともらし、ランボーへの保護者的態度はつねに変わっていない。十月、『地獄の季節』を手にしたかれはつよい感動を受け、自らもいくつかの異様な詩篇「恩寵」、「だまされたドンファン」などを作り、モンスの獄へ移ってから、詩の交換を続けていたようである。ただ、モンスに移ったヴェルレーヌにはひとつの奇蹟が訪れた。かれは恩寵にふれた。祈り、すすり泣き、希望し、イエスの愛に目ざめたのであった。「叡智」はこの体験に基いたかれのすぐれた告白の書である。かくて、ランボーがかれの眼には「悪魔」にとらわれたものと写り、その汚れをすてて新しい生活をはじめようとヴェルレーヌは必死に改宗を説くのである。しかし、「イエスにおいて愛し合おう」とすすめるヴェルレーヌが、七五年三月、シュトゥットガルトでランボーを訪れたとき、ほとんど決定的な破局が二人の間に訪れたのであった。はじめは文学の話などをして二人の仲は順調であった。ランボーも

『イリュミナシオン』の原稿を、ヌーヴォーに届けてくれるようヴェルレーヌに依頼したりしている。ところが話題が宗教のことに及ぶや、ランボーの悪罵嘲弄はものすごく、ついに何軒もビヤホールを梯子した揚句、はでな殴り合いに到ったという。この結末をランボーはドラエーに冷ややかに次のように報告している。

この間、ヴェルレーヌがこちらへやって来た、珠数を手にして……三時間後にはかれの神は否認され、わが主の九十八の傷に血が流された。かれは二日半の間、じつに分れくさくさしていた。そしてぼくの諫めでバリへもどり、さらに引続き、あちらの島で勉強をしあげに行くことにした。

この後、ヴェルレーヌはまだ、ドラエーを通じて、ランボーの消息をつねに把握しようとして試みているが、ランボーの心はずでに遠く離れ、二人は二度と相まみえることはなかったのである。これほど徹底した誤解に基く関係をもった人間同士の交渉がほかにあるだろうか。われわれはこの真に地獄的な二人の関係を思うたびに、心底から戦慄を感じずにはおられないであろう。





地獄の季節 (ジェルメース・リシエ筆)



## 自働律の分度器——映像への試み——

北 沢 純 一

我々の視覚はふたつながらを同時にみることは不可能である。クレッチマーの心理テスト『壺とプロフィール』という絵があるけれども、この二つを同時にはみれない、二つをいっしょに視ようとすれば、壺でもなくプロフィールでもなく、一つの模様となるわけであって、そしてまったくぼんやりながめているだけでは、形象としての存在価値は紙の上のシミくらいではない。△視る△ということ、つまりは、壺をかプロフィールをかどちらか一方を選び視るということに他ならない。

ダリの作品『偏執狂の顔(一九三二年)』では、このような△目の錯覚△をおこさせるよう、忠実に、緻密に描写されているし、『ヴォルテールのみえない胸像のある奴隷市場(一九四〇年)』に至っては、巧みにその方法を組み入れて、奴隷市場のイメージの中にヴォルテールの顔が幽霊のごとく突如として出現するのだ。こういった絵の手法が教えるものは、△視る△ということが△選択△という認識の本質にかかわっているということである。したがって何かを選んで視ている

こととは、他を捨てることによって視ているといえるわけだから△視える△ことは△視えない△ということに相対化される。このことは形象にかぎらない。△視える△△視えない△を拵い意味で用いれば、知覚—認識に△視える△部分と△視えない△部分とがあり、そしてそれは、△視えない—解からない△部分を△視える—解かる△部分へと高めることが可能である。だから、すなわち、映像表現を人間が獲得したことは、視覚からの認識の領域を拵げたことを意味している——人間は映像で考え得るように、あるいは、理解し得るようになったのだ。

たとえば、コトバを排して、映像にとつての純粋性と芸術性を追求しているアンダー・グラウンド・シネマを初めてみた者のコトバはこうだ——ワケがワカラナイ!!——でも何かタイハイ的で感じがいい、忍耐強く、もう一度みる——ウン? チョットカンジタナ……——もう一度——ナニナニ、フンフン——もう一回——ナント、コレハ!——さらに一度——オオ、オオ、オオ!!

彼は映像の世界を理解し、入っていく。

映画をみるためにわざわざ会場まで出かけていって得るものは、映画をへ視るVことよってしか感得できない、ある何かである。このなにもか含まれているのは、映画の娯楽性以外に、へ意識の拡大Vへ感性の拡大Vであるはずだ。このことをへ映画体験Vと呼ぶならば、そういうものが純化されたへ体験Vであるほど、よいといえる。これをへ純粹体験Vと呼ぶならば、すばらしい映画ほどへ純粹体験Vによる昂揚を味わうことが可能だ。ところで個人のへ映画体験Vは他の人々が感受したものと、多くの共通性を包含しているという意味で一般性を持つけれども、へ純粹体験Vは個別性を持つ。なぜなら「何かうそっぽい」「しらじらしい」と感じてしまったらもう終しまいであって、その映画の価値は無に帰することを、我々はおよそ忍耐強くないかぎり知っているからだ。しかし、と思う。ここが、一般に体験といわれるものとへ純粹体験Vが異なるところではないか、と思う。映画が芸術性を持つということは、「映画をへ視るVことよってしか感得できない、ある何か」が明確に強烈に感じられるということであり、そしてこの感動の明確さ、強烈さこそがへ純粹体験Vであることから、それは普遍性を持つといえる。こうしてようやく映像の世界を彷徨いはじめたのである。

ここではまず、映像は僕たちにとって何なのか、どういう存在であるのか、というもっとも重要で根源的な問題を考えてみなければならないのであるが、枚数の制限もあるのでその足掛かりとなるような文章を紹介するにとどめる。

吉本隆明が『戦後詩史論』の「6」章において、一九四五—六〇年の戦後詩の状況から「戦争の痕跡をもたない詩人の詩の問題」を論じている。嶋岡辰、谷川俊太郎、飯島耕一、大岡信、中江俊夫などの詩を引用して、「これら若い詩人の映像にたいする一般的な傾向」としての特徴を「言語の映像を感覚的な連合として理解して、意味的な連合として解しない一面体である」として映像から何らかの意味性をぬきとっていることを指摘している。そしてこれは「自己意識が伝統とされ、他と切れているために本質的に生まれてくる手法」であり、「歴史と切れ、他との共通事項を切りとられた自己意識の孤立性であり、戦後社会が若い世代にあたえた変化」であるのだとして、「思想的な脈絡」のうまれえない、映像と若い戦後詩人との関係を論じている。

映画も現在、その状況にあるのだ。

(きたさわ じゅんいち・法学部二回生)

# ドール

泉 良樹

映画に関するコラムを担当して欲しいとの依頼があつて、かつ利害が一致したので引受けたのであるが、お勧め品の映画評論をしたところで役立つとは思えず、第一それだけの力量がない。仕方なく、いかげんに書くこととなる訳である。

最近はいい映画と云われそうなものが売れる訳ではなくて、映画という商品が当る当らないは、その映画のおもしろさに関係がある以前に、観客の何に反応するかということと映画製作者の需要創出の遣り方の問題のように思える。

一般に言われるように、観客は見たいと思つているものを見るのではなく、見たいと思わされて、自ら自身の感受性に拘わりなく、見に行くに過ぎないといちおうは言えるのであるが、実際は、もっと複雑なのではないか。つまり自己の判

断基準を他に依存させているのであるが、もとより、個有に或る価値基準を持つことは、不可能なのである。何がいかどんな映画が良いかは、長期的にみて、客観的に計る使用価値といふべきものが、存在しない。

映画会社(配給会社)の宣伝の内容に、嘘偽りがあるのならともかく、その方法に、すでに見られるごとく、黒を白とは云わず、話題になつてゐる状況自体を映画を媒体として売つてゐるのであるから、映画やその他の芸術と呼ばれてゐるものの価値には、本来それを作つた人以外に本質的価値などない訳だし、ひよっとしたらそれすらない訳だから、映画の宣伝文句につられて、ハツマラナイ映画Vを見に行つたところで、問題は、その映画の出来具合というより、つられて見に行く行動を起した人の行動基準にこそあるというもので、宣伝した映画会社を責める訳にはいかない。彼らは儲かるもの、つまりは、売れるものしか売れる気はないのだし、自分で決めないのならば、替りに何が良いか教えてあげようというものだ。不遍的な価値基準がない以上、その基準自体を観客に与えて、欲求を創出する方法を取つたとしても悪くはいえまい。勿論、価値感が、或る実体に対するレッテル貼りだとしても、歴史的、伝統的にみて、階層序列があるのは、当然だが、最近のマスコミ文化に代表されるが如く、一つのを、独りで作り上げていく過程を捨て去つた今、価値感自体も幻想で

あって、一般に云われるように、価値感の多様化などという高級なことが起きているのではなく、実際は、まったく逆の下位レベルでの価値の一般化が進んでいると見るのが、自然だ。

今日の宣伝は、使用価値を伝えるのではなく、むしろ評判を作り出し、観客はその状況の中に参加するためにチケットを買っているのではないか。正に流行は作り出される。

僕は、これが一概に悪い事とは思わない。自ら選択しないという事は、自分で選択しないということを選んでる訳であって、その判断の拠り所となったものを問題としなければ、最早意味をなさない段階にきているのである。

世の中が、そこまで親切になったのか、それぞれ各人の多様性に答えられる程に、又無批判に任せてもよいと判断出来る程に、いごちが良くなったのだろうか。それとも、選択する苦痛に堪えられない程に、現代人が弱くなったのか、はたまた、何にでも適応出来るようになってきたのか。

思うに、マスコミ——特にテレビとは恐ろしいもので、僕は、今は、三ヶ月に一時間も見ないから、昔の事になるのだけれど、あれは、押しつけがましい事この上なく、おせっかいにも、脳髓に闖入してくる情報屋であって、食べたくない物も口の中に無理遣り押し込み、そのうちそれにも慣れて、スイッチを切る事が、段々むずかしくなっていくのである。

もう中毒なのである。ここに来て創造力は、退化の一途を辿り、自己限定が始まる。

但し、この害は子供より大人に大きい。なぜならば、子供は、好奇心の塊で、どんな刺激も創造力や空想力を掻立てるからである。

そして、このことから、自己選択の放棄と自己限定の傾向が決定され、いつも食卓でテレビがつきっぱなしの様に、頭の中でテレビのスイッチは入りっぱなしになっていると推察する。外の世界がテレビであり、即、自己の内部のテレビ世界なら、異和感なく、不適應症なく、選択の自由をある一つの状況にあずけても大丈夫と判断する前提は出てくる訳ではある。まったく恐ろしい参加の方法である。矛盾がなくては発展は望めない。自己と世界の間に、矛盾が無くなるはずはないだろうに、資本主義の矛盾拡大の隠蔽の仕方と運動にそっくりではないか、といいつつ、僕はニヤニヤするのです。

話しが、映画のことから大幅に逸れたが、昔ながらの愛すべき映画好きの人達は、アウトサイダーに純化していくしかないようだ。

(いすみ よしじゅ・商学部四回生)

# 読書の方法

平田重和

教養フランス語の授業中に、テキストの中にフランスの作家名が出てきた時、余談として常識を問うような気持ちで、フロベールの「ボヴァリー夫人」、あるいはバルザックの「谷間のゆり」を読んだことのある人、ないしは知っている人は手をあげてごらんと尋ねて、五〇人一クラスのような教室で手を上げた学生が数名バラバラとしかいかなかったことがあり、しかも手を上げた学生はノイローゼにでもかかっているような文学青年(?)タイプといった学生で驚いたことがあった。たまたまそのクラスは文学嫌い、とりわけフランス文学などには興味のないクラスだったのかなと思ったりして、その後二、三度別のクラスで同じようなことを試みたことがあったが結果は似たようなことであつた。ちゃんとした質問事項を

整えたアンケートといったようなものではなかつたので正確なことは言えないが、スタンダールの「赤と黒」、アンドレ・ジイドの「狭き門」、アルベール・カミュの「異邦人」あたりは、それでも知っているパーセントはもう少し高かつたことを学生諸君の名誉(?)のためにつけ加えておくが……。

いづれにしろ、最近の学生諸君は——といえいかにも年寄りじみた言い方になってしまふが——こういった小説は大学に入る以前の段階では(あるいは以後もそうらしいが)あまり読まなくなっているらしい。なぜそういう傾向になつてゐるのだろうか。その辺の事情を専門的に調べたこともないし、又そういった関係の書物を読んだこともないので、偉らそんなことはいえないが、一つには大学へ入るまでの受験競争の過程で、文学書に親しんだりしている暇がなかつたのではなからうかと思つたりしている。その他にもまだ色々理由はあるだろう。例えば、フランス文学科の学生が「ボヴァリー夫人」を読みました、僕らには退屈な感じでピンときませんでした。それよりもサガンとかヌーボール・ロマンなどの方がピタリきます」と言っているのを最近耳にしたことがある。

フロベールとかバルザック、場合によってはスタンダールなども古典というよりも古代の遺物のような感じで、時代感覚のズレがあり、興味の対象とならないのかも知れない。



受験競争の過程で文学書がなおざりにされているとすれば、三〇年前の戦争の時に、文科系にいちはやく非常事態のしわよせがきたことに通じはしないかと危惧したりしているが、フランス一九世紀の大作家の作品名とか名前さえ知らない学生が多いことを知り、教壇に立った最初の頃にショックを受けたことがあった。

今日、コミュニケーションの手段は読書に限らず、テレビにはじまり、ラジオ、映画、録音テープ、レコード、写真といったように文字通り多種多様である。こういった情報手段の多様化のなかで、なおかつなぜ読書なのか。

テレビ・ラジオ、録音テープなどの普及発達は科学技術の進歩による当然の結果であって、いたづらにこういった情報手段を否定したり、軽蔑したりすることは人間の欲求の自然な流れに反することになる。

私は子供の時代、山深い田舎にいたので映画を見に行くのもなかなか思うようにならず、夕食後のくつろいだ一家団樂の時間に、今部屋のこの襖に、小型のスクリーンができた映画を見ることができた。それが十数年後にはテレビという形で現実にのものとなった時には、大げさに言えば、二〇世紀という時代に生まれたことを感謝するような気持ちになったことがあった。

最近はそのテレビも殆んど見なくなり、ニュース放送の他はスポーツの実況中継か、ルポルタージュ番組ぐらいになってしまったが、文明の利器としてのテレビの効用には否定し得ないものがあるだろう。テレビを例にしたが、ラジオ、録音テープ、映画といった他の文明の利器についても同様のことがいえる。

ところで、頭脳の訓練とか思想をより強固なものにしようとする点においては、このような文明の利器を利用する場合と読書という行為とは違いがあるように思える。読書する場合でも時間つぶしに単なる興味本位から受動的に読書する事がない訳ではない。しかし、一般的にいつて、読書するといふ行為はこちらから書物へ向かっての積極的な働きかけが要求されるもので、著者のいわんとするところを十二分に理解しようとするには読者の側の能動的な姿勢が必要になってくるものである。読書とはサルトルのいうようにまさしく「再創造」行為なのである。

このことは外国語の書物を読む場合のことを例にとれば、一層明瞭なことになるだろう。母国語の場合には著者の使用している言葉を殆んど本能的に著者の意味したものとして理解することができる。——ここでの話は常識的なレベルでの話で、意味論的な言語学のレベルでの話でないことを断っておく。

——ところが外国語の場合は、すでに大学へ入るまでに最低

六年間は大部分の学生諸君が英語をやってきているので今更  
いうまでもなからうが、母国語のように一筋縄ではゆかない。  
いくつも意味のある単語のその文脈にあった意味を的確にと  
らえ、全体的に著者の論旨を外すことなく読解してゆくには  
多大の努力を要する。まさしく絶え間ない「再創造」行為で  
ある。

又テレビの例になって申し訳ないが、テレビ、ラジオなど  
の場合は——学校向けの放送など最近では色々工夫されて  
いるようだが——積極的参加ということはやりにくく、つい  
受動的な姿勢、安易な姿勢にならされてしまう。幾何学の問  
題など図形がパラパラと分解し、又パラパラと集合して、ハ  
イノ、この三角形とこちらの三角形は同じ面積なりといった  
具合に証明されてしまえば思考力は身につかないことはい  
うまでもなからう。

大学教育、あるいは大学生生活と高等学校までの教育との相  
違といえはいくつかあるだろうが、筆者は、高等学校までの  
教育では知識の習得にウエイトが置かれ、大学においては、  
更に深い知識の習得を要求されることはもちろんであるが、  
思考力、ことにあたったの判断力を養成する点、簡単にいえ  
ば自らが考えるんだという点が、それまでの学校生活と異な  
るところではなからうかと思っている。

本学では教養課程と専門課程という明確な区別はないが、

基礎課程にあたる前半の一年ないし二年間は専門ということ  
にこだわらず、大いに読書してもらいたいと思う。このよう  
な言い方をすれば、新入生に対する訓話めいた感じになり、  
いささか気恥かしい気もするが、もし、タイムトンネルとい  
うようなものがあって、再び大学入学の頃の時点に戻ること  
ができるならば、古今東西の古典という古典を（文学書に限  
らない）読破する意欲をもって書物に対するのだがというこ  
とを痛恨に近い反省をこめて今時フト思ったりすることがあ  
る。

将来、ある有力な地位につくために大学生活があるように  
はそれは貧弱な大学生活となるだろう。最近の大学生はあま  
り無駄なことはしないと言われたりしている。読書は考えよ  
うによっては無駄な事柄の最たるものかも知れない。山歩き  
をしたり、スポーツに打ち興じている時に人生の何たるかを  
悟ったりすることも大いにあるだろう。そういったような時  
には書物など恐らく無用であらう。

フランス文学会での大先輩である桑原武夫氏が時には書物  
から離れて山を一人歩きすることの効用をどこかで語ってお  
られたように記憶している。しかし、このような教えがあて  
はまるのは、ある程度の読書家に対してのみあてはまる教訓  
であるように思われる。

（ひらた しげかず・文学部助教）

# 書物とのつきあい

市川訓敏

書物には様々な評価の仕方が可能である。それは各人の顔つきがそれぞれがうように、人々の関心のあり方、生活態度等によってかなり異なったものになるはずである。読むという作業に限定しないとすれば、或るべきあいにはそれは、たまたぎ売って生活の糧をうるための手段ともなろうし、室内装飾品の一部であったりもするだろう。一説によれば、食べることも可能であると聞く。例えば単語帳を暗記して、そのページをちぎって食べれば忘れないというのであるが、私はいまだ試みたことがない。このようにして挙げていけばきりがなく、書物はその時々に応じて様々な性質をもちうるのだ、その評価の仕方も一概に決めるわけにはいかない。むしろ、書物というものは、無限大に読んでいっても必ずしもすぐれ

た人間になるわけでもなく、また全然読まなくとも何ら生活に支障をきたすものでもない、というぐらいの了簡から出発して、ちょうどいいかげんになるのではないかと思う。われわれのまわりには、さほど教育をうけていなくとも、いくらでもすぐれた人を見つけることができるからであり、知識の多少は何らの人間的優越をも示すものではないからである。読書論などで、古典を読むことが推奨されたりもするが、一定の問題意識なしに読んだところで、頭が痛くなることはあるにせよ、何にも後に残っていないというのが落ちであろう。やはり書物とのつきあい方は、それぞれの人が自分勝手に決めてゆくしかないし、またそうでなければ身につくものでもない。だから、専門書ならいざ知らず、新入生に向かって、どういう本を読めといったことを言うつもりはさらさらない。むしろ賢明なる学生諸君にとっては有難迷惑というものである。編集部の方も、そういうことは期待されていないようだから、書くとしたら、結局のところ、これまでの自分の書物とのつきあい方を書くしかあるまい。もっとも、書くのに都合のよさそうなつきあい方もしてこなかったし、こういうテーマを与えられて改めて考え出したにすぎないから、さほど学生諸君にとって参考にはならないのではないかとも思っている次第である。

先ほど、書物を読まなくても何ら生活に支障をきたすもの

ではない、と書いた。実際、世の中の多くの人々は仕事を終え、家に帰って寝るだけの生活をしているし、読みたくとも読む暇のない人も多くいようが、書物にさほど必要性を感じていない人も数多くいるだろう。生活レヴェルの領域では、書物の介在をとりたてて必要としないからである。だから、『ドイツ・イデオロギー』のなかでエンゲルスが、朝に狩猟をし、昼からは魚を取ったりし、夕になれば親しい友と談笑・論議するといった生活を、一種の羨望をこめて語った時、私自身かなりの共感を抱いたものである。その意味で学者の仕事などは、生活レヴェルからみれば逆立ちしたようなものであり、これほど人間の本性に逆らうものはないといえよう。

それでは何故書物を読むのだろうか。この問題は一度まともにも考えるにあたいするものであると思うが、私の場合自然にまず考え出されるのは、一言でいえば、それが面白いから、というごく平凡な答えである。他のかなりの部分を犠牲にしても書物の世界に入ってゆけるのも、畢竟そうした面白さに抗しえないということが基底にあるからだろうと思う。少年期に貸本屋で読んだ、猿飛佐助や霧隠才藏などはかなり次元が異なるが、面白さという点では多少似かよった感じがないでもない。私の関係する歴史学の分野でいえば、高校時代などに学んだ歴史の解釈などは大抵今日では通用していない。例えばルネッサンスといえば、文芸復興とも呼びならわ

されているように、暗黒の中世のなかから人間性の回復、個の自覚を標榜した近代の出発点であるというイメージが強いが、実のところそうした現象は、むしろ、魔女裁判に象徴される中世末期の混乱のなかで、恐怖におびやかされた孤独な魂が最後の炎を燃えあがらせたものにほかならない。その意味では同様の混乱と粛清のなかで花ひらいた日本の桃山文化に類似した性質を有しているともいえる。これなどは既に歴史学の常識に属するものであるが、最近テレビでもやっている鎌倉時代に、かなり合理的な訴訟システムが制度化されていたことなどは、さほど知られてはいない。こうしたことを調べてゆくのは、それなりに私には面白いのである。その点で、かつてイングランドを征服したノルマン人の故郷近くの、ベルギー人の学者が英国に渡り、イギリス法を学ぶという冒険を、自分の祖先たちの冒険になぞらえて、同様にスリルがあると語ったことなどが思い出される。もっとも念のためには言っておけば、そう手ばなしで面白がっているわけでもないの、そうしたことは、たとえていえば百のうち一つか二つあればいいほうであるし、そうでなければ誰れもが学者になっっているにちがいない。

それに対して全く何ともなく読みふけている場合もある。先に引いた猿飛佐助ではないが、それに類したのもかなり読んでいる。ホームズなどの推理小説、坂本龍馬をはじめと

する時代小説などは中学、高校時代にあらかた読んでしまつたし、最近では星新一氏のショート・ショートから、毎日新聞の編集者であった小峰元氏の青年小説に至るまで手をひろげている。とはいえ結局のところ、くりかえして読むにたえるものとなれば、おのずと限られてしまうもので、私の場合などは、やはり漱石や、鷗外の歴史小説などが中心になってくるし、最近全集の出たハーバード・ノーマンの著述なども専門研究といったことだけでなしに、いろいろと考えさせられることが多く、結構いくども読んでいます。

ただ私の場合、かなりまともに書物にのめり込んでいったのは、自分自身の言葉にならない過剰な観念に悩まされながら、どうしようもなく苦しんでいた頃にはじまっている。少年の時期から私は、他者との回路を見出してゆくことに無器用で、めつたに口をきくこともなかった。そしてその後に至っても、自分の考えや気持を相手に伝える方法をうまく見出せないまま、過剰な観念をもてあましていたといつてよい。どうせヤクザで、ろくでもないことを考えていたのだらうが、自分ではかなり切迫した気持で、心の中は荒涼とした原野に嵐が吹きまわっているという感じであった。そういう頃に、何か心にグサッと突きささるような言葉を書物のなかに見出して、自分の気持をつかみとって、目の前にさらけだしているような印象をもったのであろう、それにすがりつくような

気持で書物の世界へ入っていったように思う。高校二年の時に刊行された三木清全集の熱心な読者であったことから思えば、その言葉というのも、あるいは三木によるものであったかもしれない。ともかくもそういう次第で、高校時代から、本当に理解していたかとはともかく、モンテニユやパスカル、ニーチェ、キルケゴール等々をはじめ、手あたり次第に読んでいったし、またそうしなければ助からないと本気で思い込んでいたものである。そうした雑多な読書から得をしたのか損をしたのかはわからないが、それまで地面をはいつくばっていたものが、徐々に見はらしのきく場所へと抜け出してゆけたという実感はある。あるいは、多くの人たちはもっと容易に、自己対象化の過程を経たのかもしれないが、私の場合にはかなりきつかったということが、頭に残っている。ともあれ、あの当時のことを思い起こせば、それなりになつかしくもある。

(いちかわ くにとし・法学部専任講師)



# 新入生のための

## 入門書リスト

かってしきりに近代知性が問題とされた時があった。近代主義と生産力理論の超克を意識したその対極には、「何故学ぶのか」という素朴で根源的な問いかけが山積みされていた。過去形で語らねばならない時間の風化が、ひどく我々に憐みを与えるが、そうした営為は今もなお日常性の奥深く引き継がれていることも確かである。新入生と称せられる諸君に啓蒙ぶって入門書などの紹介を試みたのは、しばらくは既成知識の摂取を媒介として、それへの否定へ向かうべき何かを蓄積すべき時期であると考えたからであるし、一方では既成知識総体への反語的な意識の提出でもある。何はともあれ、入門書という類の本は、一つの体系を学ぶための一針に過ぎないが、少なくともそれに費す時間のロスは避けることができるであろう。そうした意味で、このリストは極めてオーソド

ックスな選定をしてあるし、いわゆるアカデミズムに近づくための初歩的に必要な本は最低限取められているはずである。読書とは本来内発する意識に言葉を与える以外の何物でもないだろうし、誰かの言葉によって自らに権威付けることは、おそらく何の意味ももたない。諸君がこのリストを読み、あるいは実際に本を手にして、嘲笑するのか、大学生的な気分になるのかは別にして、次の言葉を引用して簡単な序としたい。「時に、情念を理論化した時、結晶しないドロドロした有機的部分は切り捨てられる。しかし、そのまともらずに切り捨てられたものの中にこそ今後の僕たちにとって重要なものが含まれているように思われる。……言葉の無力さと同時に、単なる言葉、肉体と遊離した言葉を信じてはならない事を僕たちに教えたのだ」(山本義隆「知性の叛乱」)



人間の花

■ 読書論 ■

読書案内

読書論

私の読書法

私の読んだ本

一日一話読書こぼれ話

小説の方法

— 現在のな文学理論の水準を示した書

完本紙つぶて

読書人の立場

読書人の園遊

読書人の壺中

牙ある蟻

標識のある迷路

小事故読書案内(上・下)

世界の書物

日本の書物

読書の技術

続読書の技術

世界文学をどう読むか

S・モール 岩波新書

小泉信三 "

大内、茅 "

松田道夫 "

准陰生 "

大江健三郎 岩波現代選書

谷沢永一 文芸春秋

" 桜楓社

" 冬樹社

" "

" 関大出版

加藤周一 朝日新聞社

紀田順一郎 新潮社

" "

" 柏書房

" "

" "

H・ヘッセ 新潮文庫

読書の学

続読書紀行

読書術

本の神話学

日本の名著

世界の名著

近代読書論

■ 入門書シリーズ ■

学問のすすめ

法学のすすめ

経済学のすすめ

社会学のすすめ

心理学のすすめ

文学のすすめ

物理学のすすめ

哲学のすすめ

数学のすすめ

歴史学のすすめ

教育学のすすめ

経営学のすすめ

吉川幸次郎 筑摩書房

杉原四郎 未来社

加藤周一 光文社(カッパブリックス)

山口昌男 中公文庫

桑原武夫 中公新書

河野健二 "

外山滋比古 みすず書房

大河内、湯川 筑摩書房

井上、潮見 "

伊東、佐藤 "

作田、日高 "

波多野、藤永 "

高橋、和巳 "

井上、健 "

梅原、橋本 "

前原、村田 "

堀米、庸三 "

斎藤、喜博 "

占部、都美 "

化学のすすめ  
政治学のすすめ  
伊上、大沼、道家 筑摩書房  
岡義、京極、福田 "

法学を学ぶ人のために  
瀧川 春雄 世界思想社

政治を学ぶ人のために  
中川 淳 "

哲学を学ぶ人のために  
高坂、渡辺 "

中国哲学を学ぶ人のために  
藤沢 令夫 "

歴史を学ぶ人のために  
本田 濟 "

社会学を学ぶ人のために  
奈良本辰也 "

マスコミを学ぶ人のために  
仲村 洋一 "

早川、津金沢 "

原典による哲学の歩み  
岩崎、斎藤 講談社

原典による歴史学の歩み  
林、沢田 "

原典による教育学の歩み  
村井 実 "

原典による心理学の歩み  
南 博 "

原典による社会学の歩み  
安田 三郎 "

原典による経済学の歩み  
中山、宮沢 "

原典による法学の歩み  
伊東 乾 "

法律学の基礎知識  
水本、山田、福田 有斐閣

法律用語の基礎知識  
谷口 利平 "

現代政治学の基礎知識  
内田、内山、河中 有斐閣

政治思想史の基礎知識  
有賀、内山、田中 "

近代経済学の基礎知識  
藤田、宮沢 "

経済学用語の基礎知識  
荒、種瀬 "

マルクス経済学の基礎知識  
深町、村田 "

日本資本主義発達史の基礎知識  
宮本、大石 "

経営学の基礎知識  
小川、村田 "

社会学の基礎知識  
松原、大橋 "

現代教育学の基礎知識(一)  
中内、吉田 "

現代教育学の基礎知識(二)  
" "

西洋哲学史の基礎知識  
木田、伊東 "

近代日本思想史の基礎知識  
橋川、鹿野、平岡 "

心理学の基礎知識  
藤永、大山 "

心理学用語の基礎知識  
" "

日本史の基礎知識  
杉原、金井 "

近代日本史の基礎知識  
今井、大江 "

世界歴史の基礎知識(一)  
木村、西嶋 "

世界歴史の基礎知識(二)  
" "

憲法の基礎知識  
田口、小嶋 有斐閣双書

サルトル 世界の大思想 河出書房

ニーチェ " "

ウェーバー  
ヘーゲル  
フロイト

世界の大思想 河出書房  
" "  
世界の名著 中央公論社

### ■戦後日本思想大系■

―戦後の思想的な成果と欠陥を体系的にとらえ直し、  
将来を展望しようとする

1 戦後思想の出発	日 高 六 郎	筑摩書房
2 人権の思想	武 田 清 子 編	" "
3 ニヒリズム	梅 原 猛	" "
4 平和の思想	鶴 見 俊 輔	" "
5 国家の思想	吉 本 隆 明	" "
6 革命の思想	植 谷 雄 高	" "
7 保守の思想	橋 川 文 三	" "
8 経済の思想	伊 東 光 晴	" "
9 科学技術の思想	星 野 芳 郎	" "
10 学問の思想	加 藤、大 野、丸 山	" "
11 教育の思想	佐 藤 忠 男	" "
12 美の思想	羽 仁 進	" "
13 戦後文学の思想	高 橋 和 巳	" "
14 日常の思想	高 島 通 敏	" "

### ■法 学■

15 現代日本論  
16 現代人間論

久 野 収  
小 田 実  
" "

法学入門	末 川 博	有斐閣双書
法学を学ぶ	芦 部、河 本	有斐閣選書
法学読書案内	日本評論社編	日本評論社
法学学習案内	谷口、石田、中 川、山下	" "
法律パズル	戒 能 通 孝	" "
法学基本書案内	清 水、森 泉	" "
法学をどう学ぶべきか	石川、平野、雄川	有斐閣
法の窮極に在るもの	尾 高 朝 雄	" "
法における常識	P・G・ ヴィノグラドフ	岩波文庫
昭和憲法史	長谷川正安	岩波書店
権利の為の闘争	イェーリング	日本評論社
―権利の自己主張が権利者の義務であることを説く―		
政治学を学ぶ	内 田、内 山	有斐閣選書
政治思想史入門	山 崎、勝 田	有斐閣双書
政治学研究入門	岩 永 健 吉 郎	東大出版
現代政治の思想と行動	丸 山 真 男	未来社

―戦後政治学の原点を示す

日本の思想  
君主論

丸山 真男 岩波新書  
マキアヴェヱリ 岩波文庫

## ■ 経 済 ■

経済学原論  
ケインズ

宇野 弘藏 岩波全書  
伊東 光晴 岩波新書

—『一般理論』の内容と限界について

資本論入門  
資本論の世界

向坂 逸郎  
内田 義彦

—資本主義の現実と緊張をたたえて成立する資本論の世界を解明する

経済学入門  
経済学入門  
資本論物語

千種 義人 同文館  
宮川 実 青木書店  
杉原、佐藤 有斐閣

資本論(全五卷)

—マルクス経済学入門のベストセラーの一つ

賃労働と資本

—いうまでもない、マルクス経済学の芸術的体系

帝国主義論

マルクス 大月書店  
レーニン

—現代資本主義分析のための必要不可欠な古典

近代経済学を学ぶ  
大石、伊達 有斐閣選書

不確定性の時代  
ケインズ経済学入門  
雇用・利子及び貨幣の一般理論  
ケインズの経済学

ガルブレイス TBS  
ハンセン ブリタニカ  
ケインズ 東京創元社  
D・デイラード 東洋経済

## ■ 史 学 ■

歴史とは何か

E・H・カー 岩波新書

—現代における歴史の意味を問うたもの

考古学とは何か

V・G・チャイルド 河出書房

日本史年表

日本歴史大辞典編

世界史年表

日比野 丈夫

日本史研究入門(I~IV)

大塚、佐原 著 東大出版

史学概論

中山 浩一 著 有斐閣選書

世界歴史(I・II)

飛鳥を考える(I・II) 著 学陽書房

網干 他編 岩波書店

## ■ 哲 学 ■



社会思想史入門

城塚 登編 有斐閣双書

— 近代から現代の社会思想に重点をおく

西洋哲学史

城塚 登 〃

哲学倫理用語辞典

編 著 三和書房

哲学初歩

田中美知太郎 岩波全書

現代哲学入門

エミル・ブレイユ 岩波新書

小論理学(上・下)

ヘーゲル 岩波文庫

ヘーゲル研究

中埜 肇 理想社

— ヘーゲル哲学の発展を克明に位置付け、全貌を明らかにしていく

■ 社会学 ■

現代社会学入門

日本社会学会 有斐閣双書

— 社会学の基礎理論と現代社会の動行を探る

社会学を学ぶ

佐藤、鈴木 有斐閣選書

権力と支配

M・ウェーバー 有斐閣

社会科学の方法

大塚久雄 岩波新書

— いわゆる大塚史学におけるウェーバーとマルクスの方法的接合を説く

マックス・ウェーバー

青山秀夫 〃

職業としての学問

M・ウェーバー 岩波文庫

プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神(上・下) M・ウェーバー 岩波文庫

職業としての政治 〃 角川文庫

社会学講座(一、二、六卷) 編 著 東大出版

孤独な群衆 リースマン 著 みすず書房

— 現代社会の変貌の立体的な分析としての好書

共同体の基礎理論 大塚久雄 岩波書店

自由からの逃走 E・フロム 東京創元社

— 「自由」の本質について新しい観点から解明した

■ 心理学 ■

心理学を学ぶ 大山、金城 有斐閣選書

発達心理学 依田明編 大日本図書

心理学研究法(一卷) 八木 晃編 東大出版

— 基本的手法の体系をまとめている方法論編

人間と象徴(上・下) ユン グ 河出書房

— 夢、神話、絵画などの、解明を通じ、無意識界に導く

ユング自伝(I・II) ヤッフエ編 みすず書房

分析心理学 ユン グ 〃

ユング著作集(全六巻) C・ブレンナー 日本教文社  
精神分析の基礎理論 誠信書房

夢の精神分析

E・フロム 東京創元社

—夢の分析に心理学的実証をもちこんだ

悪について

紀伊国屋書店

生きるということ

—人が生きる上での基本的な存在の仕方を平易に述べる

プログラム学習による心理学入門

ベル、ハント 学習研究社

心理学入門

フロイトの方法

宮城音弥 岩波新書  
牧康夫

## 商学

会計学の学び方

会计学入門

会计学総論

わかりやすい会計入門

会计学入門

会计学の基礎理論

明解簿記(一・二)

絵でわかる簿記

絵でわかる経営分析

経営学を学ぶ

宮川、小林 有斐閣選書

プログラム学習による経営学入門

現代の経営(上・下)

抄訳マネジメント

G・R・テリー 学習研究社  
編 著 ダイヤ  
モンド社

## 化学

新しい生化学の領域

一般化学

化学結合論入門

初等化学結合論

無機化学

有機化学要論

新化学

パーロー物理化学(上)

パーロー物理化学(下)

パーロー物理化学問題のとき方

ベネット、フリーデン 共立出版

白井、吉岡他

ポーリング

G・I・ブラウン

ブルロツト

ブルースター

研究 会編

パーロー

藤城恭一

## 物理

■ 数 学 ■

詳解 物理学演習(上)	後藤、山本、神吉	共立出版
詳解 物理学演習(下)	後藤、西山、山崎	" "
詳解 力学演習	後藤、山本、神吉	" "
詳解 電気磁気学例題演習	山口 勝也	コロナ社
演習 物理学(上)	若 桑 光 雄	培風館
演習 物理学(下)	" "	" "
物理学概論	荒木源太郎	" "
物理学の構成	押田 勇 雄	" "
力学	テンダウ、リフシツ	東京図書
基礎物理学	吉川、青木	学術図書
詳解 微積分演習 I	福田、安岡他	共立出版
詳解 微積分演習 II	" "	" "
詳解 微分方程式	占 部 実	" "
新数学シリーズ(5)行列と行列式	吉 屋 茂	培風館
新数学シリーズ(15)数学史	竹 隅 良 一	" "
微積分学演習	桐 村 信 雄	" "
演習工科の数学 I	田 島、天 野	" "
演習工科の数学 II	小 西、深 見	" "

演習工科の数学 III	近藤、渡辺他	培風館
解析学序説(上)	一 松 信	" "
解析学序説(下)	" "	" "
微積分分	船 戸、古 俊	学術図書
線形代数	寺 田 文 行	サイエンス社

※ここに掲げた書物は、四月二十三日(月)から、五月十二日(土)まで、書籍部店舗において『入門書フェア』として、全書籍取りそろえます。組合員証提示のうえで一〇%還元となります。

# 書籍部便り — 書籍部案内

書籍部では、組合員の利用を出来るだけ考  
えて品揃えを行っています。店舗スペース  
の問題もあり、決して充分とはいえません。  
そこで、当書籍部は予約カウンターの活用と  
店舗前企画をもって、この不充分性を補おう  
と考えています。どうぞ、活用して下さい。

## 予約カウンター利用方法

- ① 店舗の中に必要とされる書籍が見つから  
なかった時、予約して下されば約10日間  
くらいで、その書籍を取り寄せいたしま  
す。
- ② 雑誌及び全集に関して定期予約して頂け  
れば、確実に、しかも定価の10%引で供  
給致します。
- ③ L・L教材の申し込みも予約カウンター  
でお引き受け致しております。

## 4～6月の企画

- ・ 4 / 9 ～ 5 / 12 辞書・語学参考書
- ・ 4 / 23 ～ 5 / 12 入門シリーズ(別掲)
- ・ 5 / 14 ～ 5 / 19 古本市
- ・ 5 / 21 ～ 6 / 2 岩波書店フェア
- ・ 6 / 4 ～ 6 / 16 法学・経済書フェア
- ・ 6 / 18 ～ 6 / 30 雑誌バックナンバースー  
ル

” ガイドブックフェア

## ベストセラー

- ① 漱石全集(各巻) 岩波書店
- ② バイトくん(いしいひさいち)プレイガイド  
ジャーナル社
- ③ 宣告(上・下)(加賀乙彦) 新潮社
- ④ もう頼げえはつかない(見延典子) 講談社
- ⑤ 水の女(中上健次) 作品社



怪鳥(空襲下の難民)

# お知らせ



扉

## ●投稿募集

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表・論文エッセイ等どのようなものでも結構です。詳細については書評編集委員会まで直接お問い合わせ下さい。

投稿規定は以下の通りです。

▽原稿は原則として縦書きで、一行二〇字、一〇行(二〇〇字)を一枚と計算します。

市販の四〇〇字詰原稿用紙を使用される場合は、二枚として計算して下さい。

枚数は自由です。

▽原稿には住所、氏名、その他学部・電話番号を詳しく銘記して下さい。

▽原稿は一切返却しません。必要な場合にはコピーをとっておいて下さい。採用文には、こちらから連絡します。

▽採用文には、参考資料代として、三〇〇〇円以内の書籍を献本させていただきます。

▽送り先

〒565 吹田市千里山東三一〇―一  
関西大学生活協同組合「書評」編集委員会  
電(06)388-1121内線776

## ●編集委員募集

書評運動は「書評」誌発行を通じて広範な文化、運動を展開し、さらにこれらの運動の拡大、発展をめざしています。それには読者の積極的な参加が必要であり、加えて書評運動の中心を担う編集委員会の組織的強化が要請されます。

文化活動・思想運動に興味のある人は書評委員会に結集しよう。われわれは、諸君にあらゆるジャンルをこえて表現の場を提供します。

生協本部3F・書評編集委員会までお問い合わせ下さい。電話でも結構です。





影絵芝居

## 編集後記

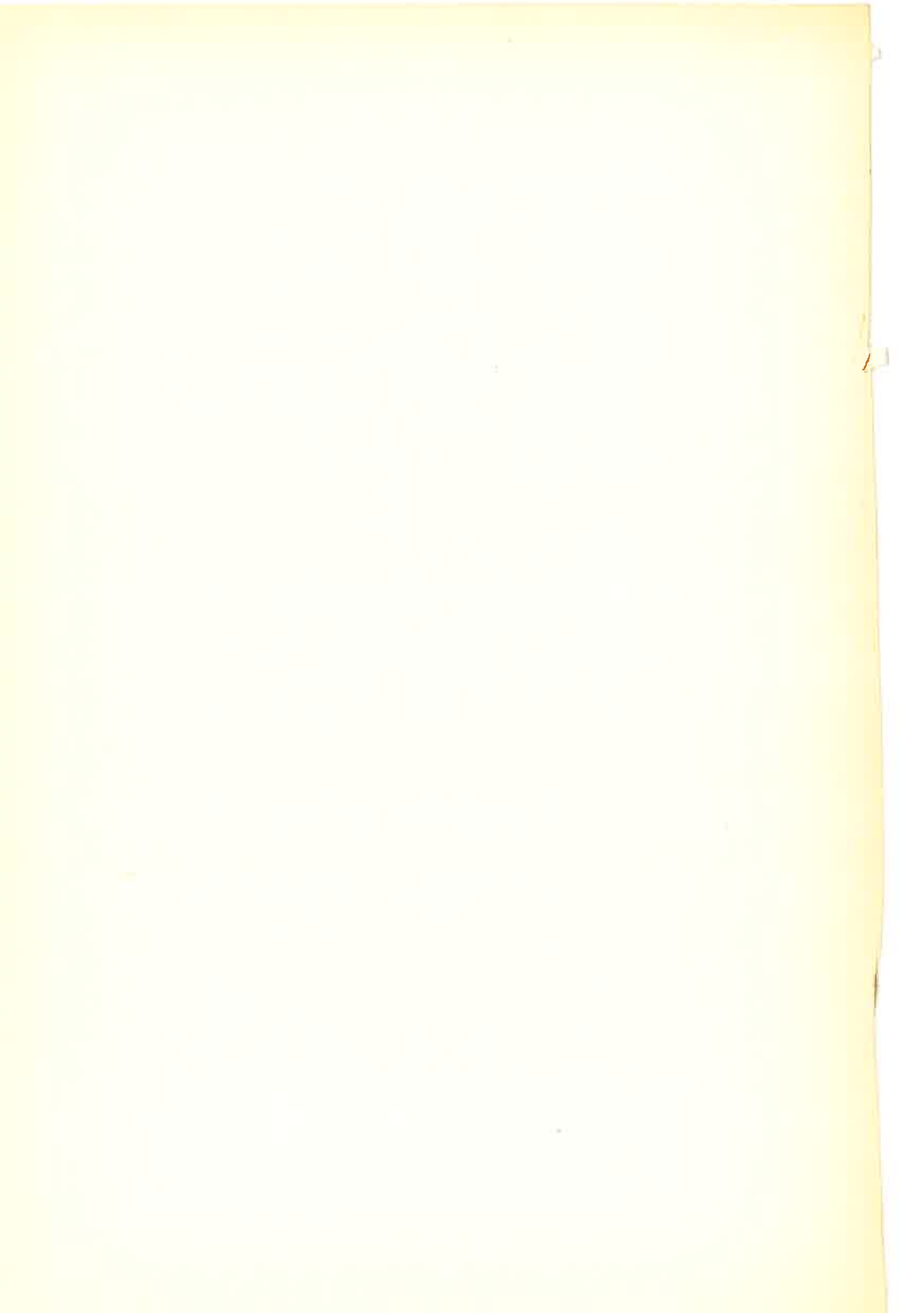
### 遊撃手の思想

薄紅色のあざやかな衣裳を身に纏っていた樹々も、人々の思惑をいっぱい吸い込んだ四月の移り気な風にさらわれて、いまではもうすっかり衰弱した裸体を私の前に晒している。

かつては、この樹の下には屍体が埋っていると本当に信じた一人の欲望過多症患者がいた。彼はこの花のあまりの美しさに驚愕してそう思わずにはいられなかった。いや、これはすでに言いすぎである。ただ彼はそう思わなければ、「あの桜の下で酒宴をひらいている村人たちと同じ権利で、花見の酒が呑めないことを知っていただけである。私たちは桜の花が美しいことを観念として先に知ってしまった。そして私たちがいま、その意味づけにひどく忙しい。

社会に取り残されまいと、必死に月二回の割りで個人的な男らしさ・女らしさを買求めている没個性的な人間の軽薄さを一笑してしまうことは非常にたやすい。しかし、そのことによって自分の軽薄さに対して無自覚になってしまうことを、私は一番恐れている。

(木暮)



1979年4月号 通巻第49号

---

編集・発行 関西大学生活協同組合・総務部「青輝」編集委員会  
送 結 先 吹田市千里山家3-10-1 (☎ 388-1121 内線 776)  
頒 価 250円